



西川 彰 理事長

座談会 50年の伝統を 未来に生かすために 奈良学園の

九州、沖縄からも学生が来てくれました。ありがたいことに、すでに今年のオープンキャンパスにも、かなり遠方から来てくれております。

西川 私は、大学というのは奈良学園のフラッグシップだと思っています。特に、奈良学園をつなぐキーワードは「人間力」だとお話ししましたが、その「人間力」を大事にする、そういう人材を養成するということで、本年からの奈良学園大学の人間教育学部と保健医療学部の開設は、学園全体にとって非常に大きな存在となるものと思っています。

総合学園としての スケールメリットを生かす

司会 最後に、西川理事長、学園のスケールメリットを生かすということについて、お聞かせ下さい。

西川 平成19(2007)年に理事長に就任致しましたけれども、その年は第二次中期計画が策定される年でもありました。これが今の経営改善計画につながるわけですが、その中で、奈良学園をこれからどうしていくのか、創立者の建学の精神を生かしながら、どういうふうな学園づくりをやっていくべきかということ、私なりにこの計画の中で言わせていただきました。

それが、現在奈良学園が掲げております本学教育の理念の「教育はロマン、夢を語るもの」です。そして、経営理念として幼稚園から大学まですべての校種をもつ総合学園としてのスケールメリットを絶対生かすべきだということを掲げました。

これは高田キャンパスにおける文化高校と幼稚園、郡山キャンパスにおける中高一貫教

育、登美ヶ丘キャンパスにおける15年間の幼小中高の教育など、各校種間の交流・連携はもちろんのこと、4つのキャンパス間の連携・協力をより一層、密にすることによって、より大きな教育効果を上げることができる、さらに、学園全体の活力を高め、更なる発展を促すことができるということなのです。

この教育理念と経営理念。そして、全国で際立つ学園づくり、オンリーワンの学園づくりという経営目標の3つを改めて策定させていただき、そういう中で私は創立者の思いを実現すべく取り組んできました。

私は奈良学園から本当の意味での「エリート」を送り出したいと思っています。選ばれた人、特別な人ということではなく、「本来の意味のエリート」です。世のため人のために尽くすことができる、そういう自己犠牲の精神と奉仕の精神に富んだ人材です。そういう本当のエリートを、この奈良学園から送り出したいのです。

その教育実践をそれぞれのキャンパスで今、具体的にしている、その中から必ずやグローバル・マインドをもち、かつ地域にも貢献するローカル・マインドも備えた、まさしく「グローバルな人材」がこの奈良学園から巣立ってくれたらいいなと、というのが私の願いです。



青木 徳康 法人事務局長



第3章

各校・園の概要

沿革

奈良学園大学 (奈良産業大学)

奈良県唯一の社会科学系大学として開学

奈良学園大学の前身である奈良産業大学は、昭和59(1984)年4月、奈良県内で唯一、経済学部(経済学科・経営学科)を有する4年制大学として生駒郡三郷町に開学した。

当時、奈良県内には国立・公立・私立合わせて6大学があったが、法学・経済学など社会科学系の学部を有する大学はなかった。そのため、県内高等学校の卒業生は県外の大学に進学するしかなく、奈良県内の公私立高等学校関係者や経済団体等からは社会科学系大学・学部の設置を望む声が高かった。奈良産業大学の開学はこうした地域社会の強い要望に応えたものであった。

したがって、奈良産業大学は開学にあたり、「実践力を有する人材の育成」を建学の精神として、地域経済の発展と地元企業の成長に貢献できる優秀な人材の育成、国際的な視野をもつ経済人の育成等を目指した。その教育方針は、地域の振興と企業の経営基盤強化のために、研究者の育成よりも実務家を養成することに重きを置き、企業の繁栄に役立つ知識と技術の修得、国際化・高度情報化・技術革新等の変化に対応できる人材の育成などを目標とするものであった。

地域のニーズ、時代の要請に即応

(1)法学部の開設

奈良学園の創立者である伊瀬敏郎理事長は、本来は、経済学部と法学部の同時開設を企図していた。法・経相互補完により、本学の将来の研究・教育体制がより強固になるとともに、法律実務に通じた人材を養成することは地元経済界、産業界、官公庁の期待に応えることにもなるとの信念からであった。しかし、そのための幅広い教育体制や施設の整備が間に合わず、やむなく経済学部のみで開学したのであり、したがって、開学後は早くから法学部開設の準備に着手した。

昭和62(1987)年4月に法学部の開設を実現した。開学からわずか3年、まだ第1期の卒業生を出していない大学で学部の増設が認められた前例は少なく、伊瀬理事長の強い信念と並々な熱意が認められたのであった。

(2)経営学部の開設

平成11(1999)年4月、経済学部経営学科を経営学部経営学科に改組転換し、経済学部(経済学科)・経営学部(経営学科)・法学部(法学科)の3学部体制を確立した。経営学部では、伝統的な経営学教育と会計学教育に加えて、実践力重視の観点から最新の情報教育を行い、経営に必要な基礎知識と時代の変化に敏感に反応できる感性を持った人材を育成することを目標とした。

三郷
&
登美
ヶ丘
キャンパス



開学当時の奈良産業大学

奈良学園大学の教育について

奈良学園大学
学長

梶田 叡一



奈良学園大学は、奈良産業大学30年の歴史を踏まえ、2014年4月から新大学名への変更を行い、人間教育学部と保健医療学部を設置して、新たなスタートを切った。

新設の2学部はいずれも、社会の新しい要請に応え、小学校教員等の免許取得と、看護師等の国家試験受験資格を得る、という高度専門職養成を目的としている。このため両学部では、1年次から高度な職業倫理と専門的な知識・技能の育成に努めると共に、自らの獲得した資格を武器に世のため人のために主体的に貢献する人間へと育てていくことを目指している。もちろん、昨年度末で募集停止したビジネス学部と情報学部の在学学生に対しても、全員が卒業するまできめ細かな教育を提供し、きちんとした形で社会に巣だっていけるよう、万全の配慮をしている。

奈良学園大学では、大学大衆化(ユニバーサル・アクセス)時代におけるモデル的な高等教育の在り方を目指し、新設2学部では少人数担任制や保護者懇談会の開催等きめ細かで綿密な教育体制の構築に努めている。また、中国や台湾などアジア諸国の大学との国際交流を一層進め、長期あるいは短期の研修留学生を受け入れ、これによって本学学生の国際感覚の涵養にも努めている。さらには、大学のカリキュラム外のスポーツや文化に関する活動について、全人的教育の立場からその一層の振興を図り、硬式野球部や陸上競技部等の全国的な活躍を支援すると共に、新設のマーチング・バンド部や各種同好会の活動に対して積極的に支援していく方針である。なお、将来における学科増設・新学部設置については、理事会の下に設置された高等教育整備・拡充委員会において議論を行っている。

沿革

奈良学園大学

(奈良産業大学)

(3)情報学部の開設

平成13(2001)年4月、情報学部(情報学科)を開設して4学部体制が整った。情報学部では、「あらゆる社会組織の中で、情報化を促進する情報化リーダーの育成」を目指した。情報技術の飛躍的な発展に伴い、社会構造の変革が技術主導で急速に進行しているとの認識から、本学部では、情報を扱う人間主導の立場から、情報にどう向き合うか、情報をどう使いこなすべきかといった側面を重視した学際的研究と教育を目標としたのである。

(4)ビジネス学部の開設

平成19(2007)年4月、経済学部・経営学部・法学部を再編統合する形で、ビジネス学部(ビジネス学科)を開設した。経済・経営・法学の3学部は、この年度からの学生募集を停止した。ビジネス学部の開設は、18歳人口が減少傾向にあり、また我が国の社会構造、経済構造等が激変していることに対応するためのものであり、その教育目標は、社会科学の基幹分野である経済学、経営学及び法学・政治学について横断的・総合的に学ぶことにより、複眼的な思考を身に付け、社会の変化に対応できる問題解決能力と実務能力(ビジネス力)を備えた人材を育成することにあつた。

(5)大学名称の変更と2学部の設置

学校法人奈良学園における高等教育再編に伴い、平成26(2014)年4月、奈良産業大学は奈良学園大学へと名称を変更するとともに、新しく人間教育学部(人間教育学科)と保健医療学部(看護学科)の2学部を開設した。なお、情報学部、ビジネス学部の2学部は、この年度からの学生募集を停止した。

人間教育学部は、主に初等教育とその連携段階の教育に携わる、教育職員の養成及び広く教育活動に関わる人材の育成を目指している。保健医療学部は、将来の多様な保健医療ニーズに応えることができる深い教養と専門的知識、倫理性などを身に付けた質の高い保健医療職者を育成することを目的としている。

奈良学園大学の特色

(1)地域との連携

経済学部では、開学当初から三郷町と連携協力に関する協定書を交わし、地域産業活性化のための研究会を設置したほか、町の委託並びに周辺自治体の委託を受けて、地場産業や地域経済に関わる調査研究を行ってきた。近年は、本学の「地域連携推進委員会」が中心となって、三郷町との「産官学地域活性化に関する懇談会」や、各種公開講座、奈良駅前大学などの開催に取り組んでいる。

情報学部による地域連携の成果としては、高取町観光協会の依頼に応え取り組んだ高取城CG再現プロジェクト(平成18年度完成)、橿原市との協力で実施した藤原京CG再現プロジェクト(平成21年度完成)などがあり、いずれも高い評価を得た。

本学では、平成17(2005)年度から図書館を一般に開放しており、現在は図書的一般貸出も行っている。平成20(2008)年度には、奈良県立図書情報館との相互協定により、県内大学で初めて、本学図書館の資料を広く奈良県民に提供するシステムを構築した。

(2)スポーツの振興

昭和59(1984)年の開学時に体育館、グラウンドを建設したのに続いて、平成8(1996)年2月に野球使用を主目的として、本格的な夜間照明設備や観覧席を備えた新グラウンドを整備した。さらに、平成12(2000)年11月には総合グラウンドとして、広大な信貴山グラウンドも完成。こうした、スポーツ施設やクラブ室の充実に伴い、開学初期から近畿学生野球連盟リーグ戦で優勝を重ねた硬式野球部を筆頭に、陸上競技部、剣道部、硬式庭球部など多くのクラブが全国レベルの大会で活躍している。

また、三郷町との連携を進める中で、信貴山グラウンドでのサッカー大会の開催、少年少女野球教室や子ども剣道教室の開催なども行い、地域のスポーツ振興に寄与している。

(3)国際交流

平成21(2009)年度に国際交流センターを設置し、学術の国際交流、外国人研究者の受け入れ・支援、学生の国際交流など、国際的な連携協力を推進してきた。交換留学生等の受け入れ・派遣などについては、積極的に海外現地調査を行い、海外の大学との協定締結を進めてきており、現在、東アジア地域の11大学と交流している。海外から特別聴講生や夏季短期研修生を受け入れ、本学からも、夏季短期語学留学生を送り出すなど緊密な連携を保っているところである。



少年少女野球教室



三郷町公開セミナー

三郷
&
登美
ヶ丘
キャンパス



①三郷中学校大学見学
②東日本大震災ボランティア
③夏季短期研修生

現況 奈良学園大学

奈良学園大学の出発

奈良産業大学は昭和59(1984)年4月、地域の要請に応じて、信貴山の麓に開学して以来30年にわたり、16,000人を超す有為の人材を社会に送り出してきた。そして、法人50周年、大学30周年に当たる平成26(2014)年4月、奈良産業大学の建学の精神と教育理念を引き継ぎ、大学名称を変更、新たに人間教育学部と保健医療学部の2学部を新設して「奈良学園大学(Naragakuen University)」が出発した。

新大学の名称には、総合学園としてのスケールメリットを生かし、学校法人奈良学園が設置する初等・中等教育機関の最終目標となる高等教育機関となるよう、また、新設の保育・教育学系(人間教育学部)及び保健衛生学系(保健医療学部)の2系統の分野を包括し、かつ各分野の視点を超えて教育理念を実現するために、法人名である「奈良学園」を冠した。

現在、三郷キャンパス(生駒郡三郷町)と登美ヶ丘キャンパス(奈良市中登美ヶ丘)の2キャンパス制で教育研究活動を行っている。

【建学の精神】

高度な専門的学術知識に裏付けられた実践力を有する有能な人材を教育・養成し、地域社会及び社会全体の発達・発展に貢献する

【教育理念】

現実に立脚した学術の研究と教育を通じて、明日の社会を開く学識と実務能力を兼ね備えた指導的人材の育成を目指し、時代の進展に対応し得る広い視野と創造性をつちかい、誠実にして協調性のある心身ともに豊かでたくましい実践力を持った人材を養成する



保健医療学部新校舎(登美ヶ丘キャンパス)



新校舎テラス(登美ヶ丘キャンパス)

三郷
&
登美ヶ丘
キャンパス

奈良学園大学の学校経営方針と整備拡充

奈良産業大学では、「地域貢献」「スポーツ振興」「国際交流」の3つの事業に力を注いできた。奈良学園大学では、これらを継承したうえで、学校経営方針を定め教育研究活動を進めていく。

また、「奈良学園大学」に名称変更し、人間教育学部並びに保健医療学部を開設すると同時に「学校法人奈良学園高等教育整備拡充委員会」を立ち上げた。同委員会においては、学部教育の充実の他に、大学院及び新学部設置も視野に入れて検討を始めている。

【平成26年度大学経営方針】

「ユニバーサルアクセス時代における奈良学園大学の高等教育を実践する」

- ① 1年次からの体系的カリキュラムを整備した、責任ある指導体制
- ② 学問的・実践的な指導者による教育の確立
- ③ 担任制を基盤とした個別の相談体制や就職指導の充実
- ④ 責任を持って一人ひとりを社会に送り出す
- ⑤ 高度なキャリアへの発展性を目指す。

奈良学園大学の人材育成

人間教育学部、保健医療学部1期生となる平成26(2014)年度の学生募集においては、「本当に必要とされる人に。」をキャッチフレーズ(2014年度版大学案内)に広報を展開した。奈良学園大学では、教員免許、看護師資格等のライセンス取得と就職を最終目的とするのではなく、学問から得た豊かな知識を社会で活用し、「知」に変換、もって他者のために行動し、他者のために尽くす「人を支えることができる人」、即ち「必要とされる人」の育成を目指している。



呈茶室(三郷キャンパス)



ビューラウンジ(三郷キャンパス)

人間教育学部人間教育学科の特色、理念、目的

学校法人奈良学園による、幼稚園から高等学校までの充実した一貫教育とその成果は、地域から厚い信頼を得ている。また、奈良文化女子短期大学では、これまで保育士、幼稚園教員、小学校教員（小学校教員養成は昭和63年に停止）を養成してきた実績を有していることから、4年制大学においても、教員養成教育を求める要望・期待が奈良県教育界、地域の産業界、NPO等から本法人に寄せられていた。

それに応えるかたちで、法人50周年、大学30周年に当たる平成26（2014）年4月、奈良学園大学に人間教育学部を設置し、同学部には初等・中等教育を横断的・複合的に行う人間教育学科1学科を置いた。本学部・学科の教育研究上の理念・目的は、教育の連携性（教育に対する社会全体の連携）と教育の一貫性（一貫した理念に基づく生涯学習社会の実現）に資する人材の育成である。その育成を、豊かな「人間力」を基盤に、柔軟な「教育力」と、高度な「実践力」を加えた3つのキーコンセプトに基づく取組によって図る。

人材育成の目標は、主に初等教育やその連携段階の教育に携わる教育職員（小学校教諭、幼稚園教諭、中学校教諭＝国語、高等学校教諭＝国語）の養成、及び、広く社会の教育活動に関わる人材（行政職員、教育関連業種での専門職など）の養成である。



幼小接続室（三郷キャンパス）



音楽室（三郷キャンパス）

三郷
&
登美
ヶ丘
キャンパス

保健医療学部看護学科の特色、理念、目的

学校法人奈良学園は、奈良文化高等学校及び奈良文化女子短期大学において看護師養成を行ってきた伝統と実績を有している（奈良文化女子短期大学衛生看護学科は平成20年に廃止）。さらに、本学園の周辺地域（奈良市・生駒市など）には看護職者を養成する大学はなかった。法人50周年、大学30周年に当たる平成26（2014）年4月に設置した保健医療学部看護学科は、奈良県看護協会及び地域の自治体並びに関係団体からの強い要望に基づいたものである。

本学部は、本法人及び奈良学園大学の教育理念に基づき、今後の社会の要請に応えるべく、高度化、複雑化、グローバル化する多様な保健医療ニーズに個別に対応する、幅広い教養と豊かな人間性、国際性、変化に対応できる汎用的能力など、確かな「学士力」を備え、「人」を中心に据えた専門的知識と高度な技術、創造力、実践力、倫理性、協調性などを身に付けた、質の高い保健医療職者を育成することを目的としている。

看護学科では、上記の保健医療学部の理念・目的を踏まえ、知識や技術の修得のみならず、看護のフィロソフィの獲得を目指し、看護の役割の拡大や質の変化に対応でき、チーム医療の一員として、他職種と協働して人類・社会に貢献できる質の高い看護職者（看護師、保健師、助産師）を育成することを目的としている。



図書館登美ヶ丘分館（登美ヶ丘キャンパス）



基礎・成人看護学実習室（登美ヶ丘キャンパス）

現況 奈良学園大学

ビジネス学部ビジネス学科の特色、理念、目的

ビジネス学部ビジネス学科は、平成19(2007)年4月、経済学部、経営学部、法学部の3学部を受け継ぐ形で「社会で生き抜く力・人格の養成を目指し、経済・経営・法律の3分野にまたがる幅広い知識を教授するとともに、これを社会で活用できる人材の育成」を目的として設置し、複眼的思考をベースとした実務・実践重視(志向)型のカリキュラム編成を行った。

学部完成年度の平成23(2011)年度から、学生が出口(進路)を意識できるように、①経営センスをもつ人材を育成する「経営コース」、②消費者ニーズの分析、商品企画・開発、広告に携わる人材を育成する「マーケティング・コース」、③企業の会計業務や資産管理業務に携わる人材を育成する「会計コース」、④広い視野で公共ビジネスに携わる人材を育成する「公務員コース」の4コースを設置した。

同学部では「演習」を重視し、1年次から4年間の「フルゼミ制」で丁寧な指導をしており、3年次からは、理論と実践を統合させて社会的実践能力の育成を目指す「プロジェクト演習」を実施、学生は、現実のビジネス世界で必要とされる様々な能力をグループで養うことが可能となっている。現在は、大手専門学校との提携で、即戦力の資格取得を目指す学生を学習面から経費面まで全面的に支援する「専門職養成支援プログラム」も実施している。



地域貢献プロジェクト(農園実習を通じて「農」にかかわるビジネスを学ぶ)



専門演習(三郷キャンパス)

三郷
&
登美
ヶ丘
キャンパス

情報学部情報学科の特色、理念、目的

情報学部情報学科は、平成13(2001)年に設置された。その教育目的は、「情報化社会の進展に主体的に取り組むことのできる人材を養成する」こととした。

学部発足当初は、情報科学系・マルチメディア系・総合型の3科目群であったが、2度のカリキュラム改訂を経て、平成23(2011)年度からはコース制を採用し、システム開発や管理を学ぶ「システムコース」とデジタルコンテンツの制作技術や表現方法を学ぶ「メディアコース」の2コースに改編した。以来、高等学校「情報科」教職課程、デジタルアーキビスト資格取得を目指す演習科目の設置、情報関連の各種資格取得への支援など、「情報化を促進する情報化リーダーの養成」を目指した教育を行っている。

また、学年を横断した「プロジェクト演習」では、通常の授業では取り扱わない課題に複数の学生が取り組む実践型の授業も採り入れ、情報化社会の進展に対応できる問題発見・解決能力、コミュニケーション能力の育成に取り組んできた。その一例として「高取城CG再現プロジェクト」があるが、これは、高取町観光協会から平成17(2005)年8月に制作依頼があり、情報学部の学生有志10名が制作に着手したものである。現地視察、調査、データ測定等を行い、過去の文献や写真をもとに再現した1年がかりのプロジェクトであった。再現CGのクオリティは非常に高い評価を得て、マスコミでも大きく報道された。このプロジェクトの後、藤原京再現CG(2010年2月完成)、郡山城再現CG(2012年3月完成)が地元の要請を受けて作成された。



高取城CG再現プロジェクト 完成したCG



情報学演習(三郷キャンパス)

沿革



開設間もない頃の保育科

奈良学園大学 奈良文化女子短期大学部

開学から現在まで

奈良学園の創設者伊瀬敏郎が、昭和40(1965)年4月大和高田市磯野に奈良文化女子短期大学(現・奈良学園大学奈良文化女子短期大学部=以下、本学と記す)を開学し、教養科を開設した。

昭和41(1966)年2月、大和高田市大字東中に完成した本学の新校舎に同年4月移転。同年度に保育科(昭和44年度に初等教育学科に改組、平成12年度に幼児教育学科第一部に改称)、翌昭和42(1967)年度に食物栄養科(昭和45年度食物栄養学科に改称)を開設した。

昭和45(1970)年4月、学校法人名を奈良学園に改称し、法人所在地を磯野から大字東中に変更した。昭和46(1971)年度に衛生看護学科、昭和48(1973)年度に音楽学科、昭和50(1975)年度に専攻科音楽専攻を開設した。

昭和49(1974)年11月1日に本学創立10周年記念式典を挙げる。この年、記念事業として新図書館が開館した。その後、学園会館(昭和56年完成)、学園ホール(昭和59年完成)など教育環境が充実。昭和59(1984)年11月1日には、本学学園ホールで奈良学園20周年の記念式典を挙げる。昭和60(1985)年以降、情報化社会への対応としてコンピューター教育も採り入れ、平成4(1992)年12月に情報教育棟を建設した。

平成10(1998)年度に福祉学科を開設し、6学科を擁する短期大学として、奈良県内外から多くの学生を迎え入れていたが、学園の高等教育改編により学科を順次縮小・廃止し、平成19(2007)年度には幼児教育学科(第一部・第三部)のみとした。

平成20(2008)年4月、登美ヶ丘キャンパスに移転。同年度末に幼児教育学科三部を廃止し、平成22(2010)年4月より、幼児教育学科第一部を幼児教育学科と改称。現在、同学科では2年コースと、働きながら学ぶことができる3年コース(長期履修学生制度)の2コース制をとっている。

平成26(2014)年4月、奈良学園大学奈良文化女子短期大学部と改称した。

建学の理想と教育目標

開学時の建学の理想は、「奈良の恵まれた自然環境を教育の場とし、その豊富な文化財を教育の素材として、文化の香り高い堅実な日本女性を育成する」ことであった。

その理想実現のために、本学は「形式的な大量教育を良しとせず、個性尊重の温かい人間形成の場として、堅実にして良心的な教育を行うことを使命とする」ものであり、「深く学問の真理を追求し、知性豊かな女性を育成するとともに近代的な教養と徳性を養うこと」を目標とした。

現在も、この精神に基づいて、50年に及ぶ人材育成の実績を踏まえつつ、一般教養の修得を基盤として幼児教育の専門性を高めるなど、教育内容の充実、担任制や少人数指導、ICT活用等による個に応じた指導を確立し、「子育てのスペシャリスト」を育てている。

登美ヶ丘
キャンパス

教育内容の充実を図る。

奈良学園大学
奈良文化女子
短期大学部 学長

吉田 明史



本学は、昭和40年に、奈良文化女子短期大学として発足した。この登美ヶ丘に移ってから、7年目。本年度から、「奈良学園大学奈良文化女子短期大学部」として、奈良学園大学登美ヶ丘キャンパスを構成する一つの大学となった。

大学名には「奈良文化」という言葉を残し、創設者の思いを継承している。開学当時、「奈良文化」は、歴史的な遺跡、仏教美術、建築などがその対象となっていたが、現在は、その範囲を広げ、選択履修科目「奈良文化論」を設定し、社会人も交えた授業をしている。この科目の目標は、奈良の歴史的遺産や文化財のよさを理解し、それを継承・発展させる取組を通して、コミュニケーション能力を身に付けさせることにある。今後は、達成目標をより明確にし、「奈良文化」に関わる必修科目を設定するほか、各科目においても「奈良文化」に関わる内容を教材として取り入れることが必要であると考え。これらのことがなければ「奈良文化」を大学名に付した意義はないと考える。

一方、学生には「保育者に必要な資質・能力」を身に付けさせ、卒業させなければならない。そのために、本年度からシラバスをルーブリック(能力をレベル化したもの)形式で示し、学生が自分の達成状況を確認できるようにしたが、今後は、このシラバスの充実を一層図っていききたい。

さらに、本学のモットー「清楚の美、健康の輝き」についても、基準を明確にしていきたいと考えている。このモットーでは、まず、「清楚」である対象を、単に身だしなみだけではなく、言葉、行動、態度にまで広げるとともに、「健康」についても、身体的な健康に限らず、精神的、社会的、知的、人間的な健康にも視野に入れて考え、これらについてもルーブリック形式で示していききたい。

このように学習と行動方針に明確な基準を設定し、学生の資質の向上を図ることができれば、建学の精神「文化国家発展の基盤となるべき女性」の育成ができるようになる。



開設当時の衛生看護学科

学科の変遷

- (1)教養科—教養学科—環境教養学科** 開学にあたって、奈良文化の理解と研究を行うことを標榜し、文化教養科の名称で文部省（現・文部科学省）に申請したが、教養科の新基準が定められ教養科にするよう指導があり、開学時には「教養科」とした。昭和43（1968）年4月に教養科第三部を設置。昭和45（1970）年4月、教養科を、教養学科第一部・同第三部と改称したが、その後、平成9年3月第三部を廃止。平成16（2004）年4月、教養学科を環境教養学科に改組し、平成20（2008）年3月に環境教養学科を廃止した。
- (2)保育科—初等教育学科—幼児教育学科** 昭和41（1966）年4月、保育科を開設。当時としては、奈良県内唯一の保育科であった。昭和43（1968）年4月、保育科に第三部を設置。小学校教員の不足に対応するため、昭和44（1969）年4月保育科を初等教育学科に改組。保育科第三部を幼児教育学科第三部に改称し、幼保コース（幼稚園教員免許、保母資格）、小幼コース（小学校教員、幼稚園教員）を設けて、保母資格・小学校教諭免許・幼稚園教諭免許の取得を可能とした。
- 昭和63（1988）年3月、小幼コースを一時停止。平成元（1989）年度より、幼保コースのみの初等教育学科とした。平成12（2000）年4月、初等教育学科を幼児教育学科第一部に名称変更。平成21（2009）年3月に同第三部を廃止して、平成22（2010）年4月、幼児教育学科第一部を幼児教育学科へと改称し、現在に至っている。
- (3)食物栄養科—食物栄養学科** 昭和42（1967）年4月、食物栄養科（食物課程、栄養士課程）を開設した。昭和45（1970）年4月に食物栄養学科と改称。平成15（2003）年3月、食物栄養学科を廃止した。
- (4)衛生看護学科** 昭和46（1971）年4月、短期大学として奈良県下唯一の看護学科を開設した。附属高等学校には昭和45（1970）年に准看護婦養成のための衛生看護科を設置しており、本学では、短大卒資格を持った教養ある看護婦を養成することを目的としていた。平成20（2008）年3月、衛生看護学科を廃止した。
- (5)音楽学科と専攻科音楽専攻** 昭和48（1973）年4月、「我が国音楽文化の発展に寄与するとともに、当地方に伝わる日本上代音楽を研修する」ことを目的として、音楽学科（器楽専攻・声楽専攻）を開設。昭和50（1975）年度には、更なる技術向上と研究のための専攻科音楽専攻を設置した。毎年秋には、奈良県・大阪府のホールで定期演奏会を実施したほか、卒業記念、専攻科終了記念の演奏会をそれぞれ定期開催し、本学内外で各種コンサートも開いた。また、音楽を志す高校生のために、夏期音楽講習会・冬期音楽講習会を開催した。平成15（2003）年3月、音楽学科及び専攻科音楽専攻を廃止した。
- (6)福祉学科** 平成10（1998）年4月、福祉学科を開設。地域福祉を担う人材を育成してきたが、平成20（2008）年3月、福祉学科を廃止した。

本学の特徴

- (1)第三部の設置** 本学の所在する大和高田市及び周辺地域には、地場産業である繊維関係の企業が集まっていたことから、地域貢献を目指していた本学では、開学時から一般通学生のためのコースと、昼夜交替制勤務の会社に勤めながら3ヵ年で終了するコースを併置していた。昭和42（1967）年度に短期大学第三部の設置基準が制定されたが、本学はこの制度のパイオニアであり、全国から視察・見学者が訪れた。協力企業との間で会社連絡会をもち、勤労学生が無事に修学できるよう支援をしてきた。
- (2)大学開放講座** 開学後まもなく昭和43（1968）年度から、大学開放講座を始めた。奈良文化講座、幼児教育講座、食物栄養講座の3講座であったが、その後、学科の増設とともに、看護学講座、音楽受験準備実力養成講座、高校生のための奈良文化講座、家庭科教育講座など、幅広い分野にわたり学外の専門家や一般人、高校生のために学術研究・研鑽の機会を提供してきた。
- (3)セミナーハウス（旧志賀直哉邸）** 昭和53（1978）年6月27日、文豪志賀直哉が自ら設計して住んでいた奈良市高畑町の旧居であった厚生年金飛火野荘を買収し、保存のため修復工事を実施、同年11月18日、短期大学のセミナーハウスとして開館した。なお、文化的遺産として、一般見学者にも開放している。
- (4)学校生活の支援** 開学の翌年から、各学科の学生をグループ別に編成し、学年度を通じて学生生活全般について話し合える指導教員を定めてアドバイザーとした。全学で、毎週1回話し合いの時間（アドバイザー・グループ・アワー＝AGH）も設けた。この制度は今も、担任制として引き継がれている。また、昭和51（1976）年度より毎年、学園から地域に出向いて父兄懇談会（現在の保護者懇談会）を実施するなど、一人ひとりの学生の生活環境、勉学の環境を整えることに力を注いできた。



幼児教育学科



①幼児教育学科フェスティバル
②夏期合宿訓練（80年代初頭）
③寮生活（70年代初頭）

現況

奈良学園大学 奈良文化女子短期大学部

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部の教育

本学は、建学の精神と理念に基づき「奈良文化のもと、社会に貢献できる女性教育」に力を注いで、平成26(2014)年度、創立50周年を迎えた。7年前にキャンパスを大和高田から登美ヶ丘に移したのが、近年の大きな節目である。移転後、幼児教育に特化した短期大学として地域に根を下ろし、教育機関としての存在を高める方針で、教育環境の整備、教育内容の向上、クラブ活動の活発化、地域貢献活動に教職員が一丸となって取り組んできた。平成22(2010)年度には、短期大学基準協会による第三者評価適格認定を受け、年々学生数も増加し、平成26(2014)年度は105名の入学生を迎え総数216名となった。

その間、第三部の経験を生かした3年コースの設置に続き、ディプロマ、カリキュラム、アドミッションの3ポリシーの制定を行った。特色ある科目として、「ソーシャルスキル演習」、「奈良文化論」、「こども学ゼミ」等を開講している。さらに今春、認定病児保育スペシャリストの資格取得のための講義を全国に先駆けて開講した。また、シラバス(学習計画)を年々改訂してディプロマポリシーとの関連を明確にし、現在、科目ごとに「獲得を目指す力、レベル1~3」を設定し、レベル2の達成を目指している。

スポーツクラブの活躍、地域貢献活動の成長(子育て支援事業、その他各種の公開講座)は目覚ましい。また、学園内の2つの幼稚園には、見学や実習、フェスティバル出演等を通して、学生の教育に大きく貢献していただいている。

本学50年の歴史の中で、大きな財産となっていた図書・資料類は、高田、登美ヶ丘両キャンパスに分散していたが、今春、奈良学園大学の開学に合わせて、登美ヶ丘キャンパスに集中させることができ、新図書館として教育・研究に大きな役割を果たすことが期待されている。



新図書館



3年コース(長期履修学生制度)

3年コースは、平成22(2010)年度から幼児教育学科に設置されたコースである。このコースは、昭和43(1968)年から設置されていた勤労学生のための「第三部」の精神を生かし、主として経済的理由で進学を躊躇する高校生に、大学教育を受ける機会を与えることを目的としたコースである。原則として授業は午前中のみで、学生は午後からの空いた時間を利用して仕事をし、経済的に自立しながら大学生活を送っている。3年間の学費の総額が2年コースと同じなので、1年毎の負担は軽減されている。また、仕事も本学が学童保育の指導員やホテル等を紹介している。

現在、本コースの学生数が増加しており、社会のニーズに応じているといえる。近畿圏はもとより、九州・沖縄をはじめ遠隔地からの入学者がいるのが特徴であり、中には親子2代続いで入学や、卒業生の紹介による入学もある。学生たちは、仕事をしながらの大学生活を同じ目標を持った仲間と協力し、励まし合って頑張っている。クラスの結束は固く、和気あいあいとした雰囲気である。そして3年後、幼稚園教諭・保育士となって故郷へ帰っていく。本学は、故郷での就職指導も行っており、就職率は2年コースも合わせて100%である。

このように、本学は50年の伝統から生まれた新しい制度をもって、いつの時代にも、自立的に学びたいという若者が自分の夢をあきらめることがないように、全学を挙げて取り組んでいる。



学生のアルバイトの様子



登美ヶ丘
キャンパス

現況

奈良学園大学 奈良文化女子短期大学部



オペレッタ

パネル発表

フェスティバルについて

本学のフェスティバルは、昭和52(1977)年に「初等教育学科音楽発表会」という名称で始められ、ピアノ独奏・独唱・二重唱・合唱・リズム合奏などで構成された本格的な発表会であった。その後、国の改訂により音楽・リズム・造形などが「表現」の名称でまとめられたことを受けて、第13回(平成元年)から名称を「初等教育学科フェスティバル」と改め、音楽以外の表現活動も取り入れることになった。

第26回(平成14年)からは、本学附属幼稚園(現・奈良文化幼稚園)の園児たちを招待し、併せて学生の家族や一般の方々にも公開するようになった。園児たちにも観て欲しいという学生の願いと、学園内の連携という双方の教職員の願いも一致して実現したのである。

登美ヶ丘キャンパスに完全移転後の第33回(平成21年)からは、①学習成果を発表する、②幼稚園・保育園・近隣地域との交流を深める、③奈良文化幼稚園と奈良学園登美ヶ丘幼稚園での実習へのスムーズな導入を図る、等の目的のもと、両幼稚園児、ちびっこ・つどいの広場の幼児、保護者を招き、授業で準備した合奏・うた・ダンス・オペレッタ・ペープサート・電子絵本・子ども学ゼミの展示等の発表を行っている。また、両園の園児たちにも、和太鼓・マーチング・うたなどの成果を発表している。

一方、学生にとっても、フェスティバルの運営を任されることで、行事運営の仕方を学習する機会となっている。

本行事への参加者のアンケート評価も高く、今後も充実させていきたいと考えている。



ゼミの作品で遊ぶ園児



みんなで一緒に歌いましょう

登美ヶ丘
キャンパス

子育て支援(ちびっこ広場・つどいの広場)と教育

本学は、子育て支援事業として、平成21(2009)年4月から地域の親子のための「ちびっこ広場」を月2回開催し、更に、平成22(2010)年10月からは奈良市の委託を受け、つどいの広場「ぶんたん」を毎日(平日10時~16時)開設している。現在は、「ちびっこ広場」を「つどいの広場」のイベントと位置付け、絵本読み聞かせや運動遊び、保健活動、音楽コンサートなどを行っている。

当初、地域貢献が主な目的であったが、現在は学生にとっての学習の場としても良く機能し始めている。現在の学生は少子化や核家族化の中で、小さい子どもと接する機会が乏しく、また他の世代とのコミュニケーションを苦手とする傾向がある。そこで本学では、学生に「つどいの広場」の見学や、ゼミ活動の一環として「ちびっこ広場」のイベントへの参加を促し、乳幼児の成長発達などについて観察や体験を深める場としてきた。参加学生からは、「保育現場で役に立つ」といった感想が多数寄せられている。

今年度からは、「子どもの保健」や「音楽」といった授業の中でも、1年次から「広場」に参加できるように構成し、実践的学びを深めることができるように取り組んでいる。これにより、学生は入学して間もない時期から子どもと触れあうことができ、授業への接続に活かしていけると考えている。また、保育者に求められるコミュニケーション能力も、実際の親子と交流できる「広場」での活動を通して、獲得できるのではないかと考えている。



ちびっこ広場



つどいの広場



つどいの広場



クラブ活動

スポーツ部の活躍

本学のスポーツ活動は、平成19(2007)年春、西川理事長から「バスケットボール部の活動を維持することで、学園に活気を与えるようにしてほしい」との指示を受けて、本格的に始まった。翌年、登美ヶ丘キャンパスへの移転に伴い、本格的な設備をもつアリーナとグラウンドで、練習や試合を実施できる体制になった。

さらに平成22(2010)年度、陸上部とソフトボール部の監督を招聘し、両部の活動を開始した。しかし、陸上部は、平成23(2011)年度に橘ひかり選手が競歩で関西インカレ6位入賞を果たしたものの、翌年選手不足のために活動を中止した。

一方、バスケットボール部とソフトボール部は次のとおり活躍している。

<バスケットボール部>

平成19(2007)年度に、短大チームは関西女子学生バスケットボール連盟2部からスタートし、翌年、全国私立短期大学体育大会において2回目の優勝を成し遂げ、上記連盟1部への昇格を果たした。それを皮切りに、平成26(2014)年度まで短大チームは全国7連覇を続けている。また、平成21(2009)年度から奈良産業大学(現・奈良学園大学)との合同チームを結成して上記連盟に加盟し、平成24(2012)年度に1部6位、インカレ出場を果たしたほか、翌年にはインカレで強豪筑波大学を破る偉業を達成し、全国ベスト16位になった。

<ソフトボール部>

平成23(2011)年度、4年制大学も加盟している関西女子学生ソフトボール連盟に登録し3部からスタートした。翌年、秋季リーグにおいて1部昇格を果たし、平成26(2014)年度も同1部を堅持している。

両部とも、学生募集と本学活性化に大きく貢献している。また、奈良産業大学(現・奈良学園大学)への編入学生も毎年あり、学園内交流の礎となっている。



私立短期大学体育大会優勝 バスケットボール部



西日本インカレ ソフトボール部

登美ヶ丘
キャンパス

地域とつながる

<活発な公開講座>

地域に開かれた短大として、公開講座にも力を注いでいる。内容は、本学の立地や教員の専門性を生かした「幼児教育」「奈良文化」が中心である。

平成25(2013)年度は、①大阪府、奈良県の教育職員対象に子ども教育関係の5講座、②奈良市の子育て支援と連携した、親子対象の「いっしょにあそぼう」シリーズ4講座、③一般対象の、本学伝統の雅楽教室、奈良文化講座、大和路狛犬探訪臨地講座を実施した。

いずれも、参加者から高い評価を得るとともに、学生の学習機会としても良い機会となっている。

<サタデーオンステージ>

本事業は、登美ヶ丘キャンパスへの移転を受けて、音楽を通して地域との交流を深め、協力関係を構築できるようにという思いから始めたものである。平成21(2009)年2月、奈良県出身のマリンバ奏者松本真理子氏による演奏会をプレ・イベントとし、続けて奈良県もしくは本学と縁の深いプロの演奏家の方々に出演していただき、スタートを切った。その後、地域在住の演奏家や奈良県内高等学校吹奏楽部等の発表の場として定着し、本学の地域貢献の一つとなっている。

本年度、6年目を迎えているが、全体として高等学校からの出演が中心となっており、高円高、登美ヶ丘高、奈良高など延べ40校に上る予定である。本事業は高校生の発表の良い機会になるとともに、出演者が本学に入学するというケースが続いており、本学の広報活動となっている。

今後は、可能な限り本学の学生が運営に携わる体制を整え、学生の学びの機会となるように図るとともに、子育て支援事業とも連携して、親子で参加できるイベントの実施も考えていきたい。

本学の特色をより発揮し、地域とつながる事業を展開していくことは、本学の立つ基盤を強固にするものであり、今後内容を精査、向上させながら更に発展させていきたい。



サタデーオンステージ



公開講座



大和路狛犬探訪臨地講座

沿革

奈良文化高等学校

開学の趣旨

学校法人中和学園（学校法人奈良学園の前身）が昭和40（1965）年4月、大和高田市磯野に奈良文化女子短期大学（現・奈良学園大学奈良文化女子短期大学部）及び同付属高等学校（現・奈良文化高等学校＝以下、本学と記す）を同時開学した。

奈良文化女子短期大学は、「奈良にふさわしい大学として独自の学風を樹立して、文化国家建設の中核となるべき女性を育成すること」を建学の理想とし、付属高等学校では、生徒がその学風に馴染むように、真摯な環境と雰囲気の中で、絶えず短期大学と一貫性を持たせながら、堅実にして良心的な教育を行い、あたたかい人間形成の場を創ることを目的とした。

したがって、本学の教育方針は「あたたかく、やさしい日本女性の特性を重んじ、躰を大事にし、近代的センスのある女性を養成する」ことであり、そのために短期大学との交流・連携をもとに充実・徹底した指導を行ってきた。

以来、本学はその精神を一貫して受け継ぎ、心身ともに健康で、誠実にして良識を備えた女性の育成に努めている。

50年のあゆみ

昭和40（1965）年4月10日、磯野校舎2階の教室で付属高等学校の第1回入学式を挙げる。短期大学は同じ教室で、4月15日に入学式を挙げた。昭和41（1966）年度に短期大学が保育科を開設することとなり、磯野校地では手狭なことから、大和高田市大字東中に確保していた新しい校地に校舎（短大棟・中央棟・高校棟）を建設。本学も短期大学と一緒に移転した。

しかし、翌昭和42（1967）年4月に短期大学が食物栄養科を開設。校舎の増築が間に合わず、本学はいったん磯野校舎に戻ったが、同年12月末日に新校舎が完成したので昭和43（1968）年4月から再び東中校舎に移ることができた。

(1) 定時制課程の設置と廃止

昭和43（1968）年4月、定時制課程普通科を設置した。高度経済成長とともに、奈良県中部地域に繊維関連企業が集積したことから、本校周辺の事業所で働く女子のために教育の機会を提供することが目的であった。また、事業所でも従業員確保のために定時制高校を望む声が高く、その要望に応えたものでもあった。

定時制課程は、事業所の昼間2交替制勤務に合わせた、午前通学コースと午後通学コースの2コースを設けた。初年度定員100人のところに、146名が入学した。



磯野校舎（開学当時）



東中校舎（移転当時）

奈良文化と女子教育

奈良文化高等学校
校長
山田 勝美



奈良文化高等学校は、元理事長の伊瀬敏郎氏により昭和40年に大和高田市に創設されて50年目をむかえます。その建学の理念として、「由来大和の地は日本歴史上最も重要な地を占め、由緒深き大自然と多くの史跡や名勝に恵まれた意義ある土地柄であり、そこに宝蔵される文化財はその数においても、また質においても我国を代表するものです。この恵まれた自然環境を教育の場とし、その豊富な文化財を教育の素材として、文化の香り高い堅実な日本女性を育成しようと考えます。」（奈良学園20年のあゆみ）と述べています。

本校開校から46年目の平成21年度に、定員を大きく割り込む状況と老朽化した施設・設備を改善するために、「経営改善計画の策定」と「高田キャンパスの全面改築」のための委員会が設置され、当時法人本部の監査室長として、その任に当たることとなりました。その後、平成22年度から学校長として、策定した経営改善計画とそれを具現化するための、校舎改築工事をスタートしました。

- ・自然環境を大切にしながら、現状の樹木をできるだけ残す。
- 「奈良文化」を建物に具体的に表現し、具現化する。
- 最新最高の耐震性能・防災設備で、安心・安全を保障し、女子校としての魅力を感じる施設にする。

このことをコンセプトとしながら、教職員と共に、多くの時間をかけて、これからの時代に生き残れる学校を目指して、教育課程の作成にあたりました。校舎建築にも教職員の意見や希望をできる限り反映させ、また、生徒の生の声を聞き「生徒参画」の場や機会を準備しました。

私の学校経営の基本方針は、

- ・学校は、生徒が「生き生き」と活動している場にする。
- ・生徒が自信と誇りを感じて、「夢（目的）をもち」、それを実現するための具体的な目標をもって、学校生活がおくれるような場や機会を多く用意をする。
- ・学校は、教職員が、「やりがい」「居がい」を感じて働く職場にする。
- ・教職員には、参画意識を大切にして、それぞれの長所を活かせるよう適材適所への校務分掌や学級担任を考え配置することにより、自己存在感、自己有用感を持たせる。
- ・また、校務分掌では、広報活動と募集対策を非常に重要視して、広報企画室と募集対策部の2部に分けて、広報活動を活発にして、教育活動を発信することに努める。
- ・学校は、保護者や中学校・塾・地域から「信頼」される存在にする。
- ・学校をできるだけオープンにして、ありのままの姿を見ていただけるようにする。
- ・本校の校訓「清く、優しく、遅しく」を標榜しながら、これからの時代に生きていける女性リーダーの育成を目指しています。

沿革 奈良文化高等学校

昭和50(1975)年度に、中和地区に定時制課程県立高校が設置されることが決まり、早くから定時制課程の設置を県に運動し、自ら道をひらいた本学もその使命を終えることとなった。公立学校に移ることで在校生は学費負担が軽減されることから、本学では在校生を県立高校に移管した。ただし、定時制衛生看護科の生徒は県立高校に同じ科がなかったため、引き続き本学で勉強し昭和51(1976)年3月に卒業した。

これにより、本学定時制の歴史は8年間でその幕を閉じた。

(2)衛生看護科の開設

昭和45(1970)年4月、本学の全日制・定時制に、それぞれ准看護婦養成課程としての衛生看護科を開設した。翌年の昭和46(1971)年には短期大学にも衛生看護学科が開設されたので、本学衛生看護科から短大に進学すれば、一貫教育により看護婦資格取得へ向けて効果的な教育が受けられるということから、本学衛生看護科の評価は年々高くなり、昭和55(1980)年度の本学の生徒総数は普通科・衛生看護科合わせて約1,300人と、当時、奈良県下の女子高で最も生徒数の多い学校となった。



70年代の戴帽式

本学衛生看護科のもうひとつの特色は、病院奨学生制度であった。生徒は、病院から学費が貸与されて、卒業後一定期間勤務すれば学費の返済が免除されるというもので、近隣府県の50件近い数の病院がこの制度に加入していた。

平成19(2007)年4月、奈良文化高等学校に校名変更。

また、この年度から看護師(平成14年3月より名称変更)資格取得を目指す生徒のために、修業年限2年の衛生看護専攻科を開設した。高等学校3年間と専攻科2年間の、最短5年で看護師資格取得に挑戦できるコースとして人気が高い。

(3)高大一貫コースの設置

昭和63(1988)年4月から普通科の中に、高大一貫コースを設置した。15歳人口が減少傾向にある中で、本学の振興を図るために、奈良産業大学(現・奈良学園大学)、奈良文化女子短期大学(現・奈良学園大学奈良文化女子短期大学部)と連携したもので、このコースを修了した生徒は、奈良産業大学に特別指定校としての推薦入学が可能となり、奈良文化女子短期大学には全員が進学できるという特典が与えられた。

(4)教育内容の多様化

社会ニーズの多様化、生徒の個性重視の観点から、学科・コースの改編を行った。

平成23(2011)年4月、普通科をⅡ類特進コース・同スポーツ特進コース、Ⅰ類保育コース・同福祉コース・同総合進学コースに改編。平成24(2012)年4月、普通科Ⅰ類に看護進学コースを開設。平成26(2014)年4月、普通科Ⅰ類に食文化コースを開設。福祉コースは募集停止し、保育コースを子ども教育コースに改称した。

Ⅱ類特進、同スポーツ特進コースでは、難関私大やスポーツ有名校への進学をめざしている。子ども教育コースは、将来、幼稚園教諭・保育士の資格取得を視野に入れた基礎知識と技術の修得を促している。食文化コースは、学外の大学や地元企業などとの連携を通じて文化としての「食」を多角的に学び、女子力のアップをめざしている。総合進学コースは、社会でも家庭でも力を発揮できる総合的な人間形成を図るものである。看護進学コースは、普通科から看護系の上級学校への進学をめざすコースである。

本学の特色

奈良文化高等学校は、女子だけの環境で女子が発揮する「女子力」にこだわりをもってきた。男性と同様に、ではなく「女子だからできる」「女子にこそふさわしい」を大切に、生徒一人ひとりの力を引き出すところに女子高の存在がある。

創立以来一貫して、女子に特化した教育を推進してきた本学では、新しい時代の要請に応えるべく教育内容、教育施設等、ソフト・ハード面での更なる充実に努めている。



実習風景



修学旅行

- ①開校間もない頃の授業風景
- ②球技大会(80年代前半)
- ③戴帽式



最後の定時制卒業生

現況

奈良文化高等学校

時代に即応した教育

IT教育の可能性を追求する、i-Campus

平成23(2011)年4月に供用開始した新校舎みやび棟は、設計に当たって教育環境の変化を見通し、その先端に行く教育が可能なものを目指した。その一つに「i-Campus(アイキャンパス)」がある。

これは、LAN環境とタブレット端末を駆使し、WEBを利用して効果的に学習する試みである。全教室に、無線LANとプロジェクター、スクリーンを整備し、これに加えてタブレット端末 iPadを100台(平成26年4月には iPad mini を30台追加)導入することで、生徒は教室に居ながらWi-Fiを通じてWEBを利用できる。特進コースでは1人に1台、入学から卒業まで iPadが貸与され、これを自分で管理、活用している。

無線LANとiPadの活用法として最大のものは、WEB上で予備校講師の授業を聴講することができる「WEB予備校」である。本校では各コースに様々な目標をもった生徒がおり、その進路希望も多岐にわたる。WEB予備校は、時間や科目が限定的でなく、生徒個人の学力や理解度に応じて必要箇所を反復することも容易なので、学校の補習指導とは違った面から進路実現に大いに役立っている。また、次々に開発されるアプリを教員が研究、取捨選択してiPadに取り込み、生徒の意欲・関心を高めて学習効果を上げている。

この先進的教育を本校では、包括的に「i-Campus(アイキャンパス)」と呼び、そこには I can pass!(私は合格できる!)という意味も込めている。これは、未来志向のキャリア教育として報道各社から取材が相次ぎ、それを見ての問い合わせも全国から寄せられている。



i-Campus iPad授業



i-Campus WEB予備校

食文化コースをフラッグシップに食育を推進

創立以来、女子教育を専らとして来た本校では、家庭科に大いに力を注いできた。殊に食物領域の学習は、生徒もこれを楽しみにし、調理実習並びに試食は歓声の絶えることがない楽しい学習として、思い出に残る高校生活のひとつとなっていた。

近年、「食育」や「食文化」という考えが注目されるようになり、平成17(2005)年制定の食育基本法には「学校、保育所等における食育の推進」が明記された。本校では、平成23(2011)年3月に校舎を建て替えるに当たり、この新しい潮流を施設設計の大きな柱の一つとして採り入れた。完成した新校舎みやび棟のKitchen Studioでは、調理台を全てIHクッキングヒーターとし、明るく広々とした空調完備の環境で快適に調理実習を行うことができる。また、調理後の料理は隣接するホテルバンケット風の試食室に運んで、試食することにしたのも食育を意識した結果である。

平成25(2013)年12月に和食がユネスコの無形文化遺産に登録され、食文化への関心が一気に高まった。こうした中、平成26(2014)年4月に本校の「食文化コース」が満を持して開設された。調理師養成課程ではなく、校名に謳う「奈良文化」を郷土の食の側面から知り、体験し、身につけながら、食材や調理、健康、栄養、環境、食の安全、家庭と社会等について幅広く学習するもので、数多くの大学・短大・企業・団体等と提携して斯界の専門家による特別授業や体験授業を行っている。

本校では食文化コースをフラッグシップとして全校で食育を推進する。生徒には郷土の文化に触れ、自らの食に思いを致し、現代女性の生き方を考え、近い将来には母親となって文化と健康を次世代に繋げていくことが期待されている。



食育サラダバー



食文化コース新設



オールIHキッチンスタジオ



試食室

クラブ活動

キャンパスリニューアルで更なる活性化

本校では、クラブ活動は伝統的に盛んで、放課後は女子高の青春を謳歌する声がキャンパスにこだましている。特に、13を数える運動部のうち新体操、バスケットボール、ソフトボールの3種目は本校の強化指定クラブとして活躍し、全国大会の常連校として知られている。近年は、中でも新体操部の活躍が目覚ましく、平成23(2011)年8月のインターハイ10位に始まり、24(2012)年3月の全国選抜3位、同8月のインターハイ3位、25(2013)年3月の全国選抜4位、26(2014)年3月の全国選抜5位など、常に上位入賞が期待されている。平成25年度には新たにバレーボール部を強化指定クラブに加え、全国大会を狙えるよう選手育成を目指している。また、平成24年度創部の少林寺拳法部が翌年、全国大会に出場するなど、各クラブが新生奈良文化高校の活性化と歩調を合わせるように実績を伸ばしている。

文化部は、みやび棟新築によって恵まれた環境が整えられ、生徒数も増えて活況を呈している。ダンススクエアで練習を重ねる、ダンス部は校内外の発表会や大会に出場。上位モデルの楽器を新調した吹奏楽部は、プロのトランペット奏者を顧問として迎え、奏ホールで日々練習に励んでいる。他にも、茶道部が奈良文化教室、家庭部がキッチンスタジオという抜群の環境を活かして活発に活動。目新しいところでは、広大なキャンパスを花盛りにしつつある園芸部や、自ら撮影・編集した動画を演技に織り交ぜて独特の境地を開く演劇部など、13のクラブがそれぞれに創造的な活動を行っており、奈良文化の新しい風が吹き始めている。

ソフトボール部



バレーボール部



新体操部

伊瀬敏郎コレクション

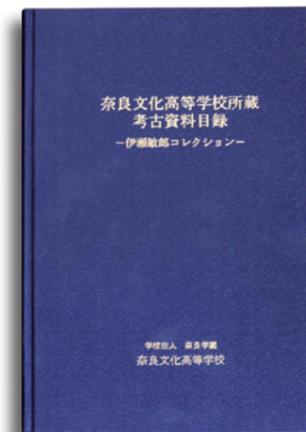
奈良文化を次世代へ継承する

昭和44(1969)年3月、学園創設者の伊瀬敏郎氏が多年にわたって収集していた、竹内遺跡出土の考古資料群が奈良学園に寄贈された。学園では、高田キャンパスの旧短大本館に保管していたが、短大が平成20(2008)年度に移転し、旧短大校舎と旧付属高校校舎は平成23(2011)年4月までに解体されることとなった。そこで、高田キャンパスに残り新校舎を建設する奈良文化高等学校がこの考古資料群を保管することにして、本格的な調査・整理のために、平成22(2010)年4月、葛城市歴史博物館に学術的調査を依頼。その成果を、平成25(2013)年11月、「奈良文化高等学校所蔵考古資料目録－伊瀬敏郎コレクション－」として刊行した。

2千点以上の資料群には竹内遺跡の他に、一楽古墳や竹内古墳群の出土品もあり、竹内遺跡の時代区分の定説を覆す発見もあった。さらに、大きな成果は昭和11(1936)年に樋口清之氏の「大和竹内石器時代遺蹟」出版によって学界の注目を集めながら、行方知れずだった幻の資料が、ほとんど散逸することなくこの中に含まれていたことである。本校ではこの資料群について、葛城市、奈良県の指定文化財として登録を目指している。平成25年11月5日、榎原考古学研究所所長・菅谷文則氏らによる記者発表を本校において行った。マスコミ各社は、資料価値の高さとともに、本校が貴重な出土品を新校舎みやび棟に常時展示し、生徒はもちろん一般にも公開していることに注目した。校名にも謳う「奈良文化」を受け継ぎ、次代に伝える高校として広く世に知られることとなった。



伊瀬敏郎コレクション記者発表



伊瀬敏郎コレクション目録



伊瀬敏郎コレクション展示

現況 奈良文化高等学校

生徒主体の学校へ

All New NB 実行委員会から始まった

平成23(2011)年4月の全面リニューアル以来、新しい奈良文化高等学校の学校づくりは山田勝美校長による、「生徒が主役」「生徒主体の学校」の教育方針の下に行われることとなった。それは数々の実績に裏付けられて着実に根付き、現在も次々に新たな展開を見せている。

最初の取り組みは、全校生徒から募集した生徒有志による「All New NB実行委員会」の組織であった。施設の設計・施工会社に生徒の要望を伝え、校舎・施設の命名(みやび棟、静ホール、来ぶらり、なでしこ門、等)、公式キャラクター「ならぶんぶん」の制定などの取り組みが、同委員会の呼びかけによる生徒参画の催しとして実行された。それ以来、たびたび全校生徒対象の応募イベントが催され、それはクラスやクラブや生徒会といった従来型の属性とはまた違った観点から、一人ひとりの生徒にとって活躍の可能性を秘めた機会となっている。変わったところでは、平成25(2013)年に集英社が開催した「制服美女コンテスト」に応募して、全国で2校だけの「人気アイドルによる制服ポスター制作権」を獲得し、全国から注目を浴びた。ほかにも、修学旅行の行先選定に生徒の意向を反映する仕組み、受験生・保護者対象の体験見学会での生徒による司会進行や学校紹介、生徒提案による校則(生徒心得)の変更など、さまざまな形で「生徒が主役」「生徒主体」が実現、実践されている。

平成26(2014)年度には、生徒募集用「学校案内」の制作に、生徒有志の委員会が携わり、生徒担当のコーナーも作られた。これは、本校教育の特徴の一つであるiPadを使用してWeb上のページと連動するもので、最先端IT教育と生徒参画の方向性が合致して実現したものである。



All New NB実行委員会 グラフィックアートさくら



人気アイドルによる制服ポスターを見る生徒

「かつらぎ・てれび」への参加

現在、「かつらぎ・てれび」の番組制作に参加している。これは、葛城市がコンテンツを制作してUstream、YouTube上で公開しているコミュニティー・ネットワークで、有志の生徒達が撮影やリポーターを務めている。応募イベントで結成した「きららん ぶんぶん」という生徒のユニットが、食育・子育てなど身近な話題に関する番組の企画、制作、編集に携わっており、数本の番組がWeb上で公開されている。テレビは、数年後にはネットワーク上に用意された番組から、見たいものを見たい時に(=オンデマンド)という形に移行すると思われる。最先端IT教育を標榜する本校では、そのツールとして欠かせないタブレット端末(スマートフォン)とWi-Fi環境を早くから導入し活用してきた。「かつらぎ・てれび」への参加で、今後もこの分野の先駆者としてオンデマンド化の流れに即応した教育を推進していく。

新生奈良文化高等学校は、生徒を中心にした「オンリーワンの女子高」として、常に内側から進化し続ける新しい時代の、新しい学校を目指している。



「かつらぎ・てれび」の番組制作の様子(校内)



「学校案内」制作への生徒参画



制服ポスター駅掲出



All New NB実行委員会作品前で



生徒参画体験見学会

沿革

奈良学園中学校・高等学校

前史

昭和40(1965)年4月、大和高田市に奈良文化女子短期大学及び附属高等学校を開学した学校法人中和学園は、昭和45(1970)年3月25日付で学校法人奈良学園に改称した。そして、この年、奈良学園は4年制大学と中高一貫校を備えた一大キャンパスを建設するべく、大和郡山市矢田丘陵に約10万㎡(3万坪)の広大な校地を買収する。しかし、買収進行中に当該土地が市街化調整区域に組み入れられ、さらに風致地区指定も受けたことによりキャンパス開発計画は難航した。

昭和53(1978)年2月に至ってようやく開発行為許可を得て、キャンパスの造成に着手した奈良学園は、4年制大学を開学するに先立ち、ひとまず中高一貫教育の男子校を開学することとして、奈良学園中学校・高等学校の設置を奈良県に申請。翌昭和54(1979)年1月に認可を受け、同年3月に校舎・体育館を完成させた。

奈良学園中学校・高等学校は、「次代の社会を担い世界に雄飛する人材」の養成を目指して昭和54年4月5日、郡山キャンパスに新築された体育館で開校式並びに第一回入学式を挙行了した。初年度入学生は、中学校生が80人(2学級)、高等学校生が55人(1学級)であった。

なお、4年制大学については、県西部の生駒郡三郷町から熱心な誘致があり、三郷町内に建設することに決めて、昭和57(1982)年7月、奈良産業大学(現・奈良学園大学)の設置許可申請書を文部省(現・文部科学省)に提出。翌年12月に設置が認可され、昭和59(1984)年4月、信貴山の東麓、三郷町立野の高台に当時の奈良県では唯一、経済学部を有する社会科学系大学として開学した。

開学後のあゆみ

学生数、学級数の推移

本校が「継続性、総合性を活かした6ヵ年の一貫教育」を打ち出したことにより、新設校にもかかわらず、中学校の初年度入学志願者数は募集定員80人に対して7.9倍(二次募集も含めて634人)に達した。さらに、開校2年目の昭和55(1980)年度には前年比45%増(919人)を記録、その後も着実に増加するとともに、昭和56(1981)年度には志願者の出身地域も奈良県、近隣府県に加えて西は広島県、東は愛知県まで広がった。

中学校は、開校当初の昭和54・55・56年度は募集定員80人の2学級編成であったが、その後定員を増員して昭和57(1982)年度に3学級編成、昭和58(1983)年度には4学級編成とした。高等学校も昭和54～56年度まで、募集定員80人(2学級)に対して志願者数は500人超から700人超へと着実に増加した。昭和57年度は、中高一貫システムで中学校卒業生が全員進学したことにより、この年は外部からの編入者はなく、翌昭和58年度より、内部進学者と別に編入生のクラスを1学級(55人)設けて、生徒を募集した。



郡山
キャンパス

大河の如く

奈良学園中学校・高等学校
校長
森本 重和



学校法人奈良学園は、昭和36年(1961)に創設されましたが、本校は、昭和54年(1979)に設立され、今年で36年目となります。大和平野を見渡す矢田丘陵中腹の広大な敷地に学舎が設けられました。そして、「次代を担う国際的な人材の育成」を目指して、活気あふれる教育活動が連綿と続けられてきました。約5,800人の有意な人材を世に送り出し、その方々が各方面で指導的な立場で活躍されています。

初代理事長(伊瀬敏郎氏)は、「至誠」「力行」を校訓に掲げ、学力が優秀なだけでなく、誠実さにあふれた人であると、方向を示されました。

その校訓の精神は教員、生徒に浸透し、本校のよき伝統として大河のように流れています。奈良学園中・高校の教育は、人間的な土壌を作りながら、その土壌に学力や体力などを堅実に育てるものであると言えるでしょう。

平成24年度には、文部科学省からSSH校(スーパーサイエンスハイスクール)に指定され、全校挙げて取り組んでいます。大学や研究施設での研修、大学の先生等に来校いただいたの出前講義、ベトナムにおける大学や高校との科学交流、農村地帯での研修など、グローバルな時代に対応した若者の育成に努めています。また、本校内の里山を生かしたシイタケ栽培、米作り、ホタルが増える環境づくりなども特色ある活動となっています。

中学校、高校教育の健全な姿を維持しながら、本校は今後とも発展し、社会から一層支持され、期待される学校となるものと確信しています。

沿革

奈良学園中学校



創立10周年記念式典

昭和58年1月、中・高の学級数増加に備えて、それまで中学校と高等学校で共有していた校舎と別に高校棟を新たに建設。また、高等学校では、内部進学者と編入生との間で、特に数学と古典の進捗差が大きく異なっていたことから、編入生だけを対象とした授業を行う「奈良学園方式」をこの年から実施した。

こうして、中学校では昭和60(1985)年度に全学年で4学級編成となり、高等学校では昭和60年度が4学級、昭和61(1986)年度が5学級、昭和63(1988)年度に至って全学年5学級編成となった。開学9年目にして、中学4学級・高校5学級という本校の、いわゆる「4・5体制」が確立した。

卒業生の進路

奈良学園高等学校は、昭和57年2月に第1回卒業式を挙行了。第1期生の55人は一人の欠落もなく無事卒業し、うち17人が現役で国公立大学に合格を果たした。昭和60年2月に、中高一貫教育を受けてきた最初の生徒(第4期生)が卒業し、この年に初めて本校から東京大学への合格者を出した。

生徒数の増加とともに国公立大学への進学者も増え、昭和62(1987)年春卒業の第6期生では64%が現役で合格。昭和63年春卒業の第7期生も53%、と高い合格率を維持してきた。進路の内訳は、開学初期から東京大学、京都大学など旧帝大をはじめとする国公立大学と医学部が多いのが本校の特色である。

教育環境の充実

平成元(1989)年6月6日、創立10周年記念式典及び祝賀会を挙行。会場は、記念事業の一環として新築された第二体育館であった。

平成12(2000)年度に本館を竣工。この年より、中学校・高等学校を男女共学とした。平成18(2006)年度からコース制を導入して、特進コース・医進コース(中高一貫)を設置。翌平成19(2007)年度には、編入生のための理数コース(高校入学生)を開設した。

特進コースは、高校2年進級時に文系・理系を選択し、目標大学別に授業を行うコースで、難関国公立大学への現役合格を目指している。医進コースは、中学3年次から国公立大学医学部受験に向けたカリキュラムを採用し、医師に必要な倫理観や使命感、責任感を重視した「志」の教育も併せて行っている。理数コースは、編入生のための高校3ヵ年のコースで、1~2年生次は内部進学者と別カリキュラムで授業を行い、3年生次に目標別講座等で内部進学者と一緒に勉強する。いずれのコースも本校独自のカリキュラムを開発したもので、開設時から高い評価を得ている。

平成21(2009)年6月5日、JR奈良駅前の「なら100年会館」において創立30周年記念式典を挙行。生徒、教職員、来賓など1,300人超が参列した。また、30周年記念事業として、平成21~23年度に校舎の建替え、青雲館(柔道場、剣道場、卓球場)の建設、新第一体育館の建設、テニスコートの整備など施設面で一層の充実を図った。新校舎の建替えにあたっては、生徒と教師の連携による「校舎

郡山
キャンパス

建替えスクールプロジェクト」を発足させて、設計内容に生徒たちのアイデアや意見を反映させるなど斬新な試みに挑戦し、機能性に優れた新校舎を完成させることができた。

平成24(2012)年3月28日、文部科学省よりSSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)に指定された。全国で178校が指定され、奈良県では本校を含めて5校だった。これは、本校周辺の里山を生かした活動や放射線調査の活動などが評価されたもので、平成23(2011)年度から始めたベトナムの高校・大学とのサイエンス交流などへの期待も込められたものであった。本校では、SSH指定校として現在も、学外サイエンス学習やSS公開講座、SS出前講義など多様な学習機会を設けている。

建学の理念、教育の目標

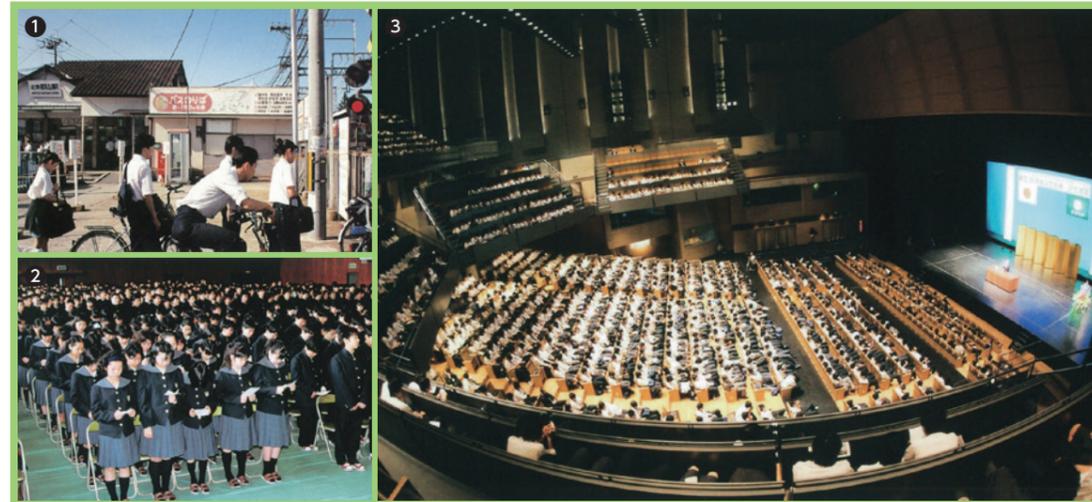
郡山キャンパスは法隆寺の北東、斑鳩の里に隣接する矢田丘陵にある。奈良学園の創設者、伊瀬敏郎氏は昭和48(1973)年に欧州各地の大学を視察して、各国の教育・研究機関がいずれも広大な公園や豊かな自然に溶けこむように配置されていることに感動し、それを理想として郡山キャンパスの整備に取り組んだ。

したがって、奈良学園中学校・高等学校の「建学の理念」は、「生徒をじかに自然に触れさせ、中学校・高等学校一貫教育を基幹として行き届いた指導により、心身ともに健全にして創造性に富んだ、意欲的にして豊かな教養と実行力を兼ね備えた、次代の社会を担い得る人材を養成しようとするものである」としたのであった。

本校の教育目標は、「次代の社会を担い、世界に雄飛し、国際社会に貢献できる有為な人材を養成する」ことであり、その実現のために、継続性・総合性を活かした6ヵ年の一貫教育を基幹とし、創造的知能を培い、豊かな情操とともに、強靱な身体を錬磨し、「進路実現」に向けての望ましい学力の養成と、豊かな人間性の陶冶を目指している。



ベトナム海外研修



①登校風景(80年代末期)
②男女共学初の入学式
③創立30周年記念式典



ベトナム海外サイエンス研修

世界を目指すSSH (スーパー・サイエンス・ハイスクール)

スーパー・サイエンス・ハイスクール (SSH) は、日本の将来の科学者・技術者を育成するためのものである。この事業は5年間続けられ、その後、改めて申請希望を出すことになっている。本校の主な取組みは、次のとおりである。

①ベトナム海外サイエンス研修

平成23(2011)年度から代表生徒5名をベトナムのハノイ工科大学と私立グエンシュエ高校へ派遣してきた。その延長線上で、平成24(2012)年度からは、ベトナム海外サイエンス研修をSSH事業の中に位置付けて、授業の一環として実施している。

平成25(2013)年度は、高校2年生の理系SSHコースの生徒全員(11名)が、12月下旬にベトナムを訪れ、ハノイ工科大学でのサイエンスに関する講義と自分達の研究の発表、グエンシュエ高校での交流と発表、ナムソン村での環境研修、日本企業による橋の建設現場での研修、養魚場での研修など広範囲の研修を行った。

国際的な視野で考え、英語で発表し交流する、アジアの発展途上国についての理解を深める等、充実した内容となっている。



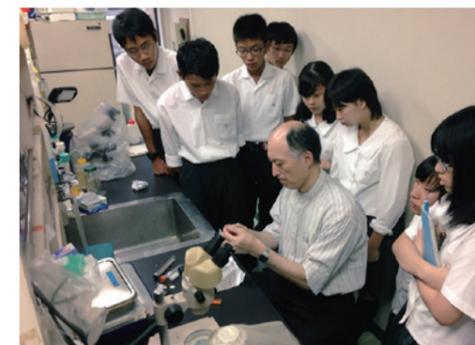
ベトナム海外サイエンス研修

②豊富な研修講座等の取組み

平日の放課後に実施する「SS出前講義」(年7回程度)、土曜日の午後に開催する「SS公開講座」(年4回程度)には、生徒が自主的に参加し、大学の先生による最先端の研究についての講義を受講している。

また、「学外サイエンス学習」では、高1の各クラスが年6回ずつ参加し、京大・神戸大・自然科学の研究所等において、研究者から直接、講義や指導を受けることができる。今夏には、「国内研修」も八重山諸島等の4箇所を実施した。

このほかにも、地域の方への「奈良学塾」の実施、「理科課題研究」などに取り組んでいる。



東京大学での研修会



神戸大学でのSSH講演



大阪府立農林水産総合研究所での研修



バスケットボール部

多様な学習

本校の敷地の中には、里山も含まれている。里山にはコナラの木が多く育っていることから、その木を適宜、伐採して、中学1年生の生徒が理科の学習の一部として、シイタケの植菌作業をしている。また、高校1年生は、里山にある小さな田に稲を植え、生物の学習の一部としている。

このように恵まれた自然環境(里山)を生かして、体験を伴った学習ができるのが本校の魅力の一つである。

教育課程の面では、医進コースと特進コースを設け、各人の将来の進路希望に合わせた学習ができるようにしており、高校2年生からは、文系・理系・理系SSHコース・医進の4系統に別れて学習している。

医進コースは、卒業生がまだ3回出ただけだが、毎年10人～20人位の生徒が国公立大医学部(医)に合格し、将来の医療を支えようとしている。

幅広い土台を作りながら、各人の進路希望の実現を熱心にサポートしているのが本校の良さである。



中学1年生 シイタケ植菌作業



高校1年生 里山整備

心身を鍛える部活動

本校は教育環境に恵まれ、広大な敷地に施設・設備が充実している。敷地は13haあり、通常の高校の3～4倍である。その中に、体育館が2棟あり、卓球場、武道場も別にある。グラウンドもサッカー用の人工芝グラウンドと、野球部などが使用する土のグラウンド、それにテニスコートが5面ある。

中学校や高校においては、学習と並んで部活動が大切な役割を果たしているが、本校では部活動に所属する生徒の割合が非常に高い。平成25(2013)年5月中旬の調査では、中1が100.7%、中2が107.5%、中3が99.4%、高1が85.1%、高2が80.9%、高3が57.1%となっている。高校生になると、自分の判断で、学習だけに専念する生徒も増えるが、高3の6月頃まで部活動をする生徒も少なくない。

生徒たちは、教室では体験できないことを部活で体験し、多くのことを自然と学んでいる。試合に負けた悔しさとそれを乗り越える力、厳しい練習に耐える忍耐力、仲間とのコミュニケーションの在り方、そして生涯続く友人との絆などである。

奈良学園で人間が育つ土壌の一つが、ここにあると思う。



柔道部



サッカー部



アーチェリー部

現況

奈良学園 高等学校 中学校

生徒が燃えるNG祭

文化祭は、いずれの学校でも生徒の楽しみになっているが、本校では特に強い思い入れがある。生徒が文化祭実行委員会を結成して、企画から準備、実施までを自分達で行うのである。

演劇などは、1学期から準備して9月初旬の文化祭に備えている。日頃の部活動で制作した作品や演技、演奏の発表。クラスで作成した展示やおおけ屋敷、ゲームセンターなど多様である。また、クラブが行う模擬店も多く、文化祭に欠かせないものになっている。

本校の一つの特徴は、6年制の良さを生かして、高校生が中学生のクラスに指導・援助に入ることである。生徒たちに、縦の健全な繋がりが生まれている。

また、保護者の方が開くバザーの売り上げは、学校にご寄付いただき、設備の充実などに役立っている。平成25(2013)年度は、テントを寄付していただいた。

文化祭は、本校生にとって青春の大切な思い出であり、自分が成長する場でもある。文化面と娯楽面のバランスを取り、その準備プロセスで生徒達が悩み、励まし合いながら、文化祭を作り上げることで、各自が育っているのである。



ダンス&ボーカル部



2012年NG祭

矢田山縦走の意気

本校の伝統行事(平成25年度で26回目)に、矢田山縦走がある。毎年2月中旬に、本校の背後にある矢田丘陵の山道12kmを駆け抜けるのである。参加者は、中1～高2までの生徒全員なので、中学から入学すれば、卒業までに5回体験することになる。

学校を出て、松尾寺への参道を駆け上がり、松尾寺から矢田丘陵の尾根伝いに走る。尾根を抜け、東明寺に出て、そこから、また、細い道を矢田寺に向かって走り、松尾寺へと駆け上がっていく。

速い生徒は、50分程度で学校へ戻ってくるが、遅い生徒は3時間近くかかる。この荒行のような縦走は、生徒たちに体力だけではなく、忍耐力、適応力をつける。卒業後には、このことが良い思い出になるとともに、どこかで困難に立ち向かう力の一助になるだろうと思っている。

厄除け寺の松尾寺、病氣平癒の東明寺、紫陽花の名所、矢田寺を通過することで、豊かな自然とともに、学校周辺の古刹の文化にも触れることができる。



沿革

奈良学園登美ヶ丘中学校・高等学校
奈良学園小学校
奈良学園幼稚園



JICA日本視察団来校 (小学校)

「開園・開校式」について

平成20(2008)年4月4日(金)。この日が記念すべき本校の開校日である。午前9時から幼稚園の入園式を行った後、午前10時から短大アリーナにおいて、開園・開校式を開催した。西川理事長の開園・開校宣言に続き、福永校園長と古川校長、幼小中の代表の子どもたちとその保護者によって、以下の「開園・開校のメッセージ」が披露された。

福永「平成20年4月。この京阪奈学術研究都市に位置する新しい街、奈良市登美ヶ丘に、園児・児童・生徒が、地域の方々と共に活躍できる『学び街』が産声をあげます」、幼稚園代表園児・保護者「私たち園児・保護者は、生き生きとした、楽しい幼稚園生活になるよう、皆で頑張ります」、小学校代表児童「ぼくは、たくさんの友だちをつくり、何事にもどんどん挑戦していきます」、小学校代表保護者「私たち保護者は、先生方と子どもたちが、共に活躍できるように心を配ります」、中学校代表生徒「私は、小さい頃からの夢を叶えるために、心と体を強くし、しっかりと勉強に励みます」、中学校代表保護者「私たち保護者は、この学校が、本当に素晴らしい学校だと周りから認められるように、先生方と我が子たちを心から応援します」、古川「奈良市の木、イチイガシのように地域に根ざし、奈良県の鳥、コマドリのように大空を羽ばたき、この学園に集う皆が志を高く、思いやりの心を持って、力いっぱい未来への一歩を踏み出していきます」、全員で「以上の言葉を、奈良学園幼稚園、奈良学園小学校、奈良学園登美ヶ丘中学校の開園・開校にあたってのメッセージといたします」



中学校第1回入学試験合格発表



第一回入学式

この開園・開校式に続いて、午前11時から小学校・中学校合同入学式を行った。小学校入学生97名、中学校入学生107名、先に入園式を済ませた幼稚園児38名と合わせて、242名による奈良学園登美ヶ丘のスタートであった。

「3+4-4-4制」について

本校で実践しているこのシステムについては、開校時のシラバス(学習計画)の中で、次のように説明している。

「奈良学園登美ヶ丘キャンパスでは、小学校、中学校、高等学校という従来の枠組みで考えるのではなく、学びの連続性のもとに、この期間を12年間の一連の教育期間として捉えています。子ども達の心身の発達と成長に応じた教育、連続したカリキュラム作成という観点から、Primary、Middle、Youthと名付けた4年間のタームで区切り、各タームからなる4-4-4制でカリキュラムを運用します。成長に伴い体に変化し性差が顕著になり始める時期、抽象的な思考能力が大きく伸び始める時期である10歳以降、抽象的な思考が発達するとともにはっきりと自他を意識する14歳以降で区切り、それぞれの発達段階を考慮した連続性の高い教育プログラムを作成しました。小中高を含む学校全体として、各段階での目標や教育方法が共有でき、しっかりと連携した教育を展開します」



小中交流ランチフェスタ



渡り廊下(レインボーブリッジ)

	幼稚園	小学1年～4年	小学5年～中学2年	中学3年～高校3年
学年構成	PP Pre-Primary	P Primary	M Middle	Y Youth
発達段階	初めて家庭を離れた生活を通して少しずつ社会性を身につけていく時期	身近なできごと、具体的な事柄を通して学ぶ楽しさがわかる時期	自己が形成され、自己主張が多くなるとともに、抽象的な思考力が伸び始める時期	抽象的な試行が発達するとともに、はっきりと自他を意識する時期
学びの重点	体験により五感を通して身の回りのことを学び、基本的な生活習慣を身につけます。	基本的な生活習慣を確立し、具体的な操作を通して基礎学力を身につけます。	これらの学習に取り組むための基礎的な知識と技能を身につけます。	将来の進路選択とそれに資する確かな学力を身につけます。



登美ヶ丘
キャンパス



第6回尚志祭

また、「3+4-4-4制」の表記については、「幼稚園をPre-Primaryとして12年(15年)の最も基礎的な教育期間として位置付け、「+」を用いて接続する表現をした」と説明している。

さらに、このシステムを採り入れる目的として、以下の3つの理由を掲げた。

- ①発達段階を踏まえて適切な教育を行いたい。
- ②校種を超えて、カリキュラムを丁寧に接続したい。
- ③異学齢交流活動を通して、社会性を育むことで、子ども達の発達を促したい。

開園・開校から6年が経過し、内部進学者の幼稚園1期生はP4(小4)生に、小学校1期生はM3(中1)生に、そして中学校1期生は高校を卒業した。12年と考えるとまだ半分を越えたところではあるが、着実に本校を愛し、凛々しく素直にすくすくと伸びる子どもたちが育っている。検証を重ねながら、より良いシステムづくりに今後とも努力していきたい。

「幼小中高合同行事」について

「3+4-4-4制」を実践するにあたって、幼稚園から高校生までによる「異学齢交流活動」として、「合同運動会」と「合同学習発表会」を行おうということになった。初年度は、10月18日(土)に合

同運動会をPグラウンドで開催した。各校種の演技や競技に加えて、今も続く「台風の日」や「スウェーデンリレー」などの種目が行われた。最後の「ドラえもん音頭」では、思いっきりの笑顔で踊る幼小の子どもたちと大いに照れる中学生の対比が観客の目を楽しませた。11月8日(土)には、短大アリーナをお借りしての「合同学習発表会」を実施。教育目標の「和の精神」にちなんで、「わ!」というテーマで、幼小中全員の合唱などに取り組んだ。

この「合同学習発表会」は、自分たちの学習成果を発揮するということで、あえて「文化祭」という言葉を避けて始まったのだが、このち学年が増えるにつれて、もっと文化祭的な要素をとという生徒たちの要望を汲み、平成23(2011)年度の第4回からは「尚志祭」と命名され、2日間の日程で現在に続いている。第2回目以降のテーマを挙げると、「Line-つながり-」(第2回)、「eleven ocean-11の海-」(第3回)、「Ticket~未来へ~」(第4回)、「Puzzle~14のピース~」(第5回)、「奈良登美クス~15本の矢~」(第6回)となり、全15学年が揃っていく様子を読み取ることができる。先の「合同運動会」も、2年目にはMYグラウンド、3年目からは総合グラウンドで実施され、現在では総勢1,000名を超える幼小中高全員によるダンス、「奈良登美弾」など見応えのある演技・競技が行われるようになった。

中学生と幼稚園児の異学齢交流



Primary修了式



第1回幼小中高合同学習発表会



第1回幼小中高合同運動会



総合グラウンド開き

中高開校からの6年間のあゆみ

平成20(2008)年に、まず中学校が開校した。中学1年入学生徒107名、常勤教員13名でのスタートであった。4月4日の入学式では、校長から「TomigaokaにちなんだT・M・G・O・Kで始まる英単語」、「Time・Manner・Genius・Opinion・Kindnessを大切にせよ」という言葉が贈られた。新しい学校に不安を感じながらも、1期生として好奇心と開拓精神に燃えた生徒たちがこの地に誕生した。

2年目の平成21(2009)年には、Y棟教室・MY体育館・MYグラウンドが完成し、高等学校が開校、高校1期生24名が入学した。4月の入学式では、小中高共通の「奈良学園登美ヶ丘校歌」の披露を行った。高校1期生は、奈良学園中学校で3年間を過ごした後、希望して本校に移動した生徒たちである。移動に際して、彼らの中では様々な葛藤があったようであるが、敢えてこの新設校に賭けてくれた。その勇気と根性はその後の3年間で遺憾なく発揮され、中学1・2期生たちも、生徒会活動やクラブ活動、学校行事等々において、高校1期生の先輩たちのパワーに大いに刺激された様子であった。

3年目の平成22(2010)年には、高校2期生11名が入学した。前年度と同じ移動方法を取ったが、希望する者はさらに少なくなった。やや肩身の狭い思いをしながらの2期生たちであったが、行事等では存在感を見せてくれる場面もあった。3月に正門及びプロムナードが完成し、6月に園児・児童・生徒・教職員・保護者で芝苗の植栽を行い、9月に青々とした天然芝の総合グラウンドが完成したという、今の登美ヶ丘全体の姿が出来上がった年でもある。



高校開校式・中高入学式

人材育成について

奈良学園登美ヶ丘
教育総括監
奈良学園登美ヶ丘
中学校・高等学校
校長



古川 謙二

「和の精神を大切に」「遅く生きる力を育む」「科学的に物事を見る力を身につける」という奈良学園登美ヶ丘の教育目標に基づいて、中学校・高校では「思いやりの心に富み、人の痛みがわかる生徒」「心身ともに健全で、判断力と規範意識に富む生徒」「将来の目標に対して計画的に取り組むことができる生徒」「自分の考えを持ち、正しく伝えられる生徒」「科学的・論理的思考を持つ生徒」を目指す生徒像として掲げている。

「和の精神」については、礼儀正しく、大きな声で挨拶すること、これがコミュニケーション力をつけるための第一歩であり、相手や対象との調和協調を開く道だと教えている。また、やがては国際社会を舞台とし、グローバルに活躍する立場だからこそ、自分が生まれ育った日本という風土に関心と理解を深めてほしいと考えている。

「遅く生きる力」については、質問する力を求めている。疑問を持ち、それを相手に質問するためには、よく調べ、よく見聞きし、よく考えることが必要である。社会に出てもただ漠然とそこにいるのではなく、そこに存在する理由や意義を考える人間であってほしいと思う。また、正義感や倫理観等の豊かな人間性を常に向上させようと努力する人間であれという思いもここに含んでいる。

「科学的に物事を見る力」については、多面的に物事を考える力や論理的思考力・表現力の育成を目指している。彼らが担う将来の社会において、リーダーとして主体的に活躍するためには柔軟な見方や考え方をもち、人々を納得させる思考力と表現力が必要である。机上の学問だけではなく、実際にやってみること、思い通りにならないことに、諦めるのではなく、悩んでみることなど、その発達段階にふさわしい自立の努力の中で、リーダーたる資質を磨いてほしいと考えている。



辯論部

4年目の平成23(2011)年の4月には、育友会館が完成。この中には同窓会室も設けられ、やがて本校を巣立って行く者たちの拠り所が整えられた。クラブ活動での活躍も見られ、弁論部が近畿大会を通過し、「第16回全国中学・高校ディベート選手権(ディベート甲子園)」へ初出場を果たし、中学全国ベスト8、高校全国ベスト16という成果を上げた。

5年目の平成24(2012)年3月に、高校1期生の卒業式を行った。中高初めての卒業式であり、校長は「奈良学園登美ヶ丘という海に、最初に滋養ある養分を与えたのは、Y棟という森に根を下ろした君たちです。ただそこにただけかもしれません。君たち自身が生きるのに精一杯だったのかもしれません。でも、その君たち一人ひとりの生き方が、土に溶け込み、川に流れ、海を生かしたのです。後に続く後輩諸君は、今すぐにはなくても、きっといつかそのことを実感するでしょう。そういう意味で、「君たちが、この学校にとっての森だった」ことを思い、この学校の卒業生であることに誇りを持ってほしいと思います」という言葉を贈った。この年の6月には、中学1期生が高校2年になり、開校当初から計画していたオーストラリア語学研修の第1回を実施した。初めての実施でトラブルに見舞われることもあったが、中学1期生たちは後に続く国際交流のきっかけを作ってくれた。

6年目の平成25(2013)年の年度末(平成26年3月)には、その中学1期生たちが卒業した。これによって、中学から入学した生徒たちの6年間がついに完成した。



高等学校第3回卒業式



第1回オーストラリア語学研修

中高の教育の特色(体験活動)について

開校当初から、「体験を重視した教養教育」を謳ってきた。中学生・高校生という思春期の大切な時期をどのように過ごさせるかを議論し、ただ6年間で勉強だけに過ごさせるか、「文武両道」として勉強と部活動があればよいのか、自由と規律についてもきちんと学ばせたい、などと様々な意見を交わす中で、社会に出て初めて取り組むのではなく、この時期に体験しておくことで彼らの将来に役立つ経験を積ませたいという話になった。具体的には、毎学年で宿泊行事や教科外活動を用意し、「調べる・体験する・考える・まとめる・発表する」等の力を付けさせ、文系理系に関わらず、すべての教科をバランスよく学ばせる教育活動を行うことになった。

M3(中1)では仲間づくりと学習習慣の定着を目的とした「宿泊オリエンテーション(兵庫県ハチ高原)」、M4(中2)では理科的・社会的体験をする「白浜研修(開校2年目までは琵琶湖)」、Y1(中3)では、平和学習と歴史文化体験としての「沖縄研修」、Y2(高1)では英会話の活用力をつける「English Camp(京都・大阪・兵庫等の宿泊施設にて)」そして、それらの完成形としてのY3(高2)での「オーストラリア語学研修(ブリスベン周辺)」を、この6年間で実施してきた。

また、その他に、年2回の登美ヶ丘講演、M3(中1)での飛鳥社会見学や奈良先端科学技術大学院大学による理科実習、Y1(中3)でのキャリアリサーチ(関西学研都市内の企業研究所訪問)やキャリアトーク(保護者による職業紹介)等の教科外活動を積極的に行ってきた。

単に、見て・触れるだけの経験に終わるかもしれないが、中高時代のそれらの体験が根や芽として、生徒たちの中に静かに熱く育っていってくれればと思います、本校の教育の特徴として継続している。



中学3年(Y1)沖縄研修



中学1年(M3)宿泊オリエンテーション(兵庫県ハチ高原)



高校2年(Y3)オーストラリア語学研修



中学3年(Y1)キャリアリサーチ

現況 奈良学園小学校

小学校開校からの6年間のあゆみ

平成20(2008)年4月、法人初めての小学校として、幼稚園、中学校とともに産声を上げた。児童は小学校1年生97名のみ、初代福永吉延校長のもと職員総勢10名の出発であった。12年一貫教育システムの中で、小学校6ヵ年に求められる学力面の充実、生活面の確立に向けた取り組みが始まった。年ごとに学年が1年ずつ増えるという先例のない学校形態であるため、授業、給食活動、清掃活動など学校運営のすべてが、いちからのスタートであった。1学年だけでの開校のため、上級児童による交流や支援の活動に代わって、幼稚園、中学校の協力も得ながら取り組んだ。

小学校という範囲を超えて、異校種異年齢交流が活発に進められ、児童の成長に望ましい影響を与えた。その中でも、第1回合同運動会、第1回合同学習発表会と、奈良学園登美ヶ丘の始まりとなる幼稚園・小学校・中学校という3校種共催による合同行事は、それぞれの発達段階の違いも見え、ほほえましい雰囲気の中で盛大に催された。また、給食を利用して、PP(幼稚園)との日常的な交流も始まった。宿泊学習もP1(小1)から始まり、奈良公園、東大寺と学校近辺の学習を端緒に実施した。11月には、児童の安全な登下校の手段としてスクールバスの運行が始まった。

2年目の平成21(2009)年には、高等学校1期生が入学し、奈良学園登美ヶ丘の一貫教育システムを構成する4校種が揃った。小学校にも2期生が入学し、入学式に続いてお迎え会も実施し、新しい仲間の入学を学校全体で祝う和やかな催しとなった。P棟1階が児童の元気な声であふれ、幼稚園との交流だけでなく、小学校でもP1(小1)・P2(小2)という学年交流も進められるようになった。奈良学園小学校児童の特徴である優しく穏やかな性格は、生来の性質や生育環境に加え、異年齢交流活動による情操の育ちからもその人格形成につながっていると考えられる。

3年目を迎える平成22(2010)年は、正門、プロムナードの完成に続いて、芝生ポット苗の植栽による天然芝の総合グラウンドも完成した。児童も総合グラウンド造成工事の見学から、芝の生育にも興味を示し、自らが関わった施設の完成を祝った。



総合グラウンド芝生植え



スクールバス納車式

登美ヶ丘
キャンパス

人材育成について

奈良学園小学校
校長
藤原 和幸



「和の精神を大切に」「遅く生きる力を育む」「科学的に物事を見る力を身につける」という奈良学園登美ヶ丘の教育目標に基づいて、小学校では「思いやりの心に富み、人の痛みがわかる子ども」「心身ともに健やかで、大きな夢に向かって頑張る子ども」「判断力と規範意識に富む子ども」「自分の考えを持って、他に働きかける子ども」「科学する心」を持つ子ども」をめざす児童像として掲げている。

「和の精神を大切に」第一歩として、小学校では「奈良学園小学校のあ・い・う・え・お+か」として、「あ：あいさつの励行」「い：いのちを守る」「う：運動をしよう」「え：笑顔でいよう」「お：思いやりの心を持つとう」「か：感謝の気持ちを持つとう」とわかりやすく、覚えやすい形で、児童の学校生活だけでなく、家庭生活においても大切にしたい項目を挙げ、実践に努めるよう働きかけている。あいさつに始まる人とのコミュニケーション力の育成だけでなく、心身ともに健やかで、お互いを思いやり、常に感謝の心を持って生活することで、実現していきたいと考える。「遅く生きる力」については、校訓「自ら生きて、生きる」の実現にもつながり、児童の自律と自立をめざしている。宿泊学習等の体験活動やグループ活動、異年齢交流活動を通し、主体的な姿勢で行動し、自己肯定感や達成感を醸成することで、自ら課題を見つけ、自ら考え、自ら判断する力を付けていきたい。集団活動の場で中心的な役割を繰り返し経験することで、リーダーシップを育て、真のリーダーへと続く、萌芽としたい。

「科学的に物事を見る力を身につける」については、科学的、理理的な論理的思考の育成に取り組むだけでなく、対象を多面的に捉え、真理の探究につながる姿勢を大切にしていきたい。発達に求められる知識の習得にとどまらず、現実の生活の中で直面する様々な問題を解決するために、自分の視点だけでなく、周囲の視点も協調的に受容し、試行錯誤を繰り返し、解決に向かえるよう、知識を活用して知恵に変える育ちを実現していきたい。

現況

奈良学園小学校

4年目の平成23(2011)年は4学年となり、P棟の全フロアで児童が学ぶ年となった。合同運動会と併せて実施してきたプライマリー・スポーツフェスタも3年目を迎え、第1・2期生を中心に児童を運営、進行に関わらせ、リーダーシップを発揮する新たな場とすることができた。準備、放送、決勝、出発、招集など運営に関わる中心的な役割を担い、児童は堂々とその責を努め、精神的な発達にも大きな意味を持つ行事となった。年度末には1期生がP課程(小1～小4)を修了し、4-4-4制の初めの課程を終えることとなった。P課程(小1～小4)修了を祝うとともに、児童自身が続くM課程(小5、小6)を意識できるよう、保護者出席の下、卒業式になぞらえた修了式を厳粛に挙行了した。

5年目の平成24(2012)年、P課程(小1～小4)の修了を経て、1期生がM課程(小5、小6)へと進級したことで、校舎も制服も異なり、授業日数も異なる2つの教育課程で進められる学校となった。M課程(小5、小6)ではM1(小5)・M2(小6)に任せる状況をより多く設定し、主体的に取り組む姿勢を強く促そうとするものであるが、その意味を自覚する児童も多く、熱心に課題に取り組み、確かな成長を遂げた。

6年目の平成25(2013)年は、奈良学園登美ヶ丘を構成する15学年がすべて揃う年となった。M2(小6)生が体験学習の集大成として、また小学校英語学習の大きな試みとして、ハワイにて宿泊学習を実施した。現地校との積極的な交流も実現し、P1(小1)から始まる奈良学園小学校の全体像を見通せる展開となった。3月には小学校1期生の卒業式を挙行することで、学校としてすべての行事を経験することとなった。卒業生83名中63名が奈良学園登美ヶ丘中学校へ進学し、3+4-4-4制一貫教育システムにおける連携の第一歩を記した。



Primary修了式



小学校第一回卒業式



第1回プライマリー・スポーツフェスタ

登美ヶ丘
キャンパス

小学校の教育の特色

奈良学園小学校は、奈良学園登美ヶ丘4+4+4制一貫教育システムの前半6年間を担う学校として、P課程(小1～小4)、M課程前期(小5、6)の2課程で構成される。知的側面の育成においては、本物体験を重視し、児童に実物・本物に触れさせる機会を設けようと、P1(小1)から宿泊学習(P1(小1):奈良、P2(小2):吉野、P3(小3):琵琶湖、P4(小4):美山、M1(小5):広島、M2(小6):ハワイ)に取り組み、発達段階に沿って学習する範囲を拡げ、見るだけ、聞くだけの知識の習得に終わることのないよう、生きた知恵に高められる活動等を設定している。教科の学習においても、PP1(年少児)～Y4(高3)までを見通して作成されたルートマップに沿って、児童の発達段階に沿った学習内容が組み込まれている。

その実践において、P課程(小1～小4)では十分な達成感を持つ経験を通じた自己肯定感の育成を目指し、M課程(小5、小6)ではアイデンティティの確立を踏まえた社会性の向上を目指している。指導の実際にあっては、P1(小1)では複数担任制によるきめ細やかな指導を進め、学校生活に慣れたP2(小2)以降からは、各学年に複数配置された学年担任により、児童をていねいに見守りながら、指導している。またP課程(小1～小4)においても、指導の専門性を高めるため、音楽、図工、体育、理科において専科制を採用し、M課程(小5、小6)では中学校と同じく全教科を専科制とし、さらに高度な授業の実践を目指している。M1(小5)段階からは定期考査を実施し、計画的な学習習慣の定着と学力の正確な把握に努めている。

情緒的側面では、グループ学習や活動、異学年交流活動、異校種との交流活動を積極的に取り入れ、登下校グループ、清掃活動グループを異学齢で構成し、学校生活全体での経験を通して児童の社会性や協調性の向上を目指している。さらには、宿泊学習の事前・事後学習などにおいて適切な課題を設定し、集団で課題解決を図ることを通してリーダーシップの育成にも努めている。



ハワイ宿泊学習 書道交流



縦割り給食



小学1年(P1)宿泊研修



ハワイ宿泊学習 アロハ交流

現況

奈良学園幼稚園

幼稚園開園よりの6年間のあゆみ

平成20(2008)年4月に、本園は開園した。3歳児男児20名、女児18名、合計38名と職員7名でのスタートであった。当時の園だよりの一節に、「待ちに待った春の日差しをいっぱい浴びて、ひときわ元気な園児を迎え、奈良学園幼稚園が今日からスタートします。教職員一同、この日を心待ちにしていました」と記されている。この日を迎えるまでに、各地の説明会で本学園の理念、目指す園児像や教育方針、教育内容の特徴にふれ魅力あふれる園の誕生を訴えてこられた。特に、本園の特色である「同一敷地内での3+4-4-4制による12年一貫教育」の土台となる、幼児教育を築きあげるよう努めている。

私たちは、子どもたちの笑顔と「先生、おもしろかった」「楽しかった」「また、明日続きしたい」という声に励まされ、日々の教育実践に取り組んでいる。幼稚園教育では、幼児の生活や発達、興味・関心を大切に、様々な体験をとおして、心も体も頭も精一杯働かせ、豊かな感性を養うとともに、生涯にわたる学習意欲や学習態度の基盤となる、好奇心や探究心を培うよう努めている。

この6年の中で、他校種との交流が年を重ねるごとに活発化し、子ども同士、教職員同士の連携が密度を増している。また、本園の教育の特徴も「異学齢交流活動・幼小連携」「体力づくり」「日本の文化・伝統にふれる」「外国の文化にふれる」「自然とのふれあい」、そして3年前より「マーチング活動(鼓笛)」の6つとなった。今後も、小中高12年一貫教育の土台となる確かな力を育てていけるよう、自らの教育活動や指導の在り方と真摯に向き合い努力を重ねていきたい。

幼稚園の教育の特色

開園当初、本園は「豊かな体験と具体的操作を通して、感性を磨き、思考力、表現力の素地を培うこと」「基本的な生活習慣や礼節、規範意識を身に付けること」「遊びや具体的な体験を通じて、身近な自然の不思議さ大切さや面白さに気付き、日本文化の良さにもふれること」「人と人との絆を大切に、思いやりや協調の心を培うこと」を目標に掲げ、具体的な施策として【異学齢交流活動・幼小連】【体力づくり】【日本の文化・伝統】【英語に親しむ(外国の文化にふれる)】を、園生活の特徴とし教育を進めてきた。その後、【自然とのふれあい】【マーチング活動(鼓笛)】も加わり、この6つを特徴とし取り組むこととなった。

具体的には、豊かな体験を重要視し、目・耳・頭・心・手など持ち得る全てを使って事物とかかわり、心を震わせ探求し、様々なことを学び取る場を大事にしながら、豊かに生きる子どもたちを育てている。幼児期は、人間形成の基礎を培う重要な時期である。子どもたちの未来につながる、今この時、この瞬間をいきいきと輝いて生活できるように保育環境を整え、温かいまなざしと適切なガイドで子どもたちに応え、伸びようとする芽を最大限に伸ばしていけるよう取り組んでいる。遊びを豊かにし、幼稚園教育の中での学びを小学校以降の生活や学習の芽生えとしてつなぎ、幼・小・中・高一貫教育の土台となる確かな力の育成を願っている。たくさんのふれあいを通じて、豊かなところを育む教育を今後も継続していきたい。

登美ヶ丘
キャンパス

人材育成について

奈良学園幼稚園
園長
西田 明恵



奈良学園登美ヶ丘の教育目標である「和の精神を大切にする」「遅く生きる力を育む」「科学的に物事を見る力を身につける」を基に、幼稚園では「心身ともにたくましい子ども」「友達との遊びを深め、コミュニケーション能力を身につけようとする子ども」「自分で考えてやってみようとする子ども」「感性豊かな心をもつ子ども」を目指す園児像として掲げている。

「和の精神」については、基本的な生活習慣や礼節を身に付けること、このことは安定した生活を送るうえでの基本であり、次第に友達にも関心を寄せ、かかわりの中で規範意識を培いながらコミュニケーション能力を身につけていくと考えている。また、四季折々の伝統行事や文化に触れる機会を大切に、自然の恵みや動植物など命あるものを大切にしようとする心や互いを思いやり協調する心などを育てている。日本の良さに気づき誇りを持って生きる子どもに育ててほしいと願っている。

「遅く生きる力」については、感性を育てる教育を大切にしている。五感を揺り動かして事物とかかわる実体験を豊かにもたせ、自ら考え、発見・表現・創造を繰り返し経験することで、心の芽を伸ばし、心身ともにバランスのとれた豊かな人物に育ててほしいと願っている。子ども時代に得た感性は、人の痛みや悲しみを感じる心を育み、物事の正しい判断力や表現力に繋がっていくものと考えます。

「科学的に物事を見る力」については、不思議なもの、神秘的なこと、美しさ、ワクワク感などは、幼児期にこそ体験したいことである。「不思議だな」「おもしろそう」「やってみよう」という心の動きは、想像力を膨らませ、新たな世界を拓く力となると考える。豊かな体験を通して未来につながる学びの一步を着実に育てていきたい。



沿革

奈良文化幼稚園

開園

奈良文化幼稚園は、昭和42(1967)年4月、奈良文化女子短期大学(現・奈良学園大学奈良文化女子短期大学部)の付属幼稚園として、大和高田キャンパスに開園した。

短期大学保育科の教育実習施設として計画され、園の設置にあたっては優れた公私立の幼稚園を視察し、それらを参考にした。校地は当初約2,000㎡(605坪)で、園舎内は開放的で明るく、広い校地と工夫された園舎が評判となって、開園後は各地から大勢の見学者が訪れた。

また、教育内容の充実はもちろん、教育実習生の指導も行うことを考慮して、優秀な教員を集め、物的環境、人的環境ともに充実したスタートとなった。

学級編成の推移と施設の整備

第1回入園式は、昭和42(1967)年4月10日に行われ、園児数は83人、2年保育の3学級編成で開園した。その後、入園希望者が増加し、願書受付の前日から並ぶほどの状況となったため、昭和44(1969)年度には6学級編成とした。昭和54(1979)年度から3年保育を開始し、園児数は着実に増え、昭和60(1985)年度に7学級、平成4(1992)年度に9学級編成となった。これに対応して、保育室の増設も数次行い、平成3(1991)年度には園舎を建て替え、同年12月に新園舎が完成し、定員を255名とした。

しかしながら平成4年度をピークに園児数は減少に転じ、平成20(2008)年度より園舎の改修をはじめとする施設、設備の改善や備品等の整備を行い、老朽化を払拭した。同時に通園バスの追加、教員の増員による保育体制の充実、また保育内容の深化、子育て支援の重視等々を実現し、徐々に保護者が期待する私立幼稚園としての満足度を高め、平成26(2014)年度には再び9学級編成となった。

本園の特色

開園以来、短期大学生の教育実習を受け入れ、また、平成23(2011)年度からは、奈良文化高等学校の保育コース(平成26年度子ども教育コースに改称)の生徒達も本園の様々な行事に参加し、実習も行っている。こうした世代を超えた人的連携が、園児の心身の成長を促す上で大切な役割を果たしている。

本園の教育方針は、「広々とした園庭、豊かな自然とふれあいの中で、のびのび遊び、また、心身ともに調和のとれた人間としての基礎を培う」ことであり、その目標とするところは、「健康で元気に満ちた子どもに育てる」「ひとり立ちができ、誰とでも仲良く遊べる子どもに育てる」「感受性や創造性の豊かな子どもに育てる」ことである。



ボール遊び(1968年頃)



1990年代の園舎

のびのび、ぐんぐん、いきいきと

奈良文化幼稚園
園長
角田 道代



昭和42年4月に開設した本園では、現在、大切な幼児期を二代に渡ってここで過ごして下さる親子もあり、園としてこの上ない幸せを感じています。

歴史ある本園ではありますが、高等教育再編に伴い、平成26年4月、奈良文化女子短期大学付属幼稚園から奈良文化幼稚園に園名変更しました。建学の精神を重んじ、地域に支えられ根ざしてきた実績を重く捉え、今以上に愛される幼稚園となるように、決意を新たに出発したところであります。

今、私達はこの歴史とよき伝統を根底とし、どんな時代もたくましく、自分らしく、豊かに生き抜く人になってほしいとの願いを込め、日々教育活動を行っています。

(1)基礎的信頼力と自尊感情の構築

社会生活の第一歩であるからこそ、家族以外の大人にも、ありのままの自分を受け入れられ、大事にされることを肌で感じて欲しいと願っています。そして、人っていいなあという基礎的信頼力と、かけがえのない自分を大切に思う自尊心を育て、生きる土台を築くことを目指しています。

(2)主体的活動の確保

目を輝かせながら意欲的にものごとに取り組んだり、遊んだり、楽しみながら生活できる子どもに育てることを目指しています。それは、心身ともに健康であるための体づくりをするとともに、自らが感じ、考え、やってみる・・・そのような自己決定の機会を繰り返し、たくましく自己実現へと向かう力を育むことにつながります。その中でさまざまな困難に打ち勝つ精神的な強さと粘り強さを身につけることができると考えています。

(3)創造力の育成

様々な刺激や選択肢に出会い、また自然に触れ、心を開放して、一人ひとりの持つ自由なイメージを膨らませてのびのびと表現する力、自由な発想で創り出す力を育むことを目指しています。与えられるものではなく、自分の心から湧いてくるものだからこそ限界はなく、無限です。「感じる力」「考える力」から生まれる「知恵」こそ、豊かに生きる力となります。

子ども時代を子どもらしく、思いきり過ごすことが「生きる力」の基になると考える私達にとって、豊かな自然と文化に恵まれた高田キャンパスには、未来への可能性が大きい広がっています。

また、ここで生活する園児が生き生きと活動し、保護者が喜びを感じ、教職員がやりがいを見いだせる園であること、この三者が同じ方向を向いて支え合う存在であることが、本園の教育力です。

これからも、園の活気を発信し続けたいと思っています。

現況

奈良文化幼稚園

奈良文化幼稚園の特色ある教育

『おりこうさんにいそがずに いっぱいあそんでかんがえて
じぶんでみつけてやってみる』

幼児期には、自分のやることを自分で決めて、楽しみながらのびのびとやってみる経験が何よりも必要であると考えている。試したり、挑戦したり、また、失敗もして…その過程において内から育つ力こそ、確かな「生きる力」となる。そのために、私達は子ども達の伸びる力を信じ『待つ』教育の実践を重ねていきたい。

(1)自由遊び

幼児にとって、「遊び」こそ「生活」であり、自分からの働きかけで生み出す時間である。興味関心、集中力、根気強さ、挑戦する心、判断力、追求心、意欲、社会性、想像力…遊びの中で、幼児が獲得していく力は、まさに「生きる力」である。



自由遊び

「子ども中心」であるべき園生活の中で一番大切にしている活動が、「自由遊び」である。決して自由放任活動ではなく、自由選択活動である。自由に選ぶ中で、子ども達の心は主体的に揺れる。遊びの中での「学び」が豊かであるように、私達保育者が子ども達の心に寄り添い、柔らかい心と体で、良質な環境＝「時間」「空間」「人間」を整えることが重要であると考えます。

本当の意味での自由を追求し、子ども達が夢中で遊び込める園を目指している。

(2)体力づくり

恵まれた広い園庭で、子どもたちは思いっきり外遊びをしている。遊びの中で、体幹＝体の幹を育てることこそ、体力の基であると考えている。幼児にとって、特化した運動能力を訓練して強化するより、遊びの中で繰り返しバランスよく体を使い、体幹がしっかりと



体力づくり

働く体をつくることが重要であり、そのことが今後の運動能力の向上や良い姿勢の保持に必須条件となる。したがって、大人のおおらかな見守りの中で、心ゆくまで遊べる環境をつくることを重視している。

また、仲間とともに楽しく体を思いっきり使って遊ぶ機会を意図的につくるために、園全体での「朝の集まり」や学年ごとの「体育遊び」を毎月1回ずつ実施している。音に合わせて体を動かしたり、縄やボールを使って楽しんだり、サーキット遊びをしたり…、運動あそびを中心に、子どもたちが楽しく、のびのび、思いっきり体を動かして活動する時間となっている。高田キャンパス全体を使っての「マラソン大会」も日常の体力づくりの成果を発揮する場として、子ども達は楽しみにしている。

そして、健康な体づくりの取り組みとして、子ども達が「裸足」で過ごす活動も大切にしている。足の指を使うこと、足底に刺激を与えることで、十分に足底機能を活性化させ、バランスを保つ体、風邪などをひきにくい丈夫な体づくりに取り組んでいる。

(3)みどりの幼稚園

月に1～2回、朝、登園してから降園するまで、一日中高田キャンパスの自然の中で過ごす「みどりの幼稚園」を実施している。おもちゃも絵本もなく、周りには自然があるだけ…。自然には、不思議がいっぱい！宝物がいっぱい！そのことを子ども達が一番よく知っていて、自然の中で、寝転がって空を眺めたり、草花を摘んだり、小石をならべたり…、また、石を裏返して小さな虫を見つけたり、木登りに挑戦する姿も見られる。一人ひとりのペースで、子どもたちは自然の中で生き生きと遊んでいる。

そして、「みどりの幼稚園」の中では、自然と向き合う楽しい「ネイチャーゲーム」にも取り組んでいる。五感を働かせ、感覚を研ぎ澄まし、自然を直接体験することは、子どもたちにとっての「心の原風景」になる。



みどりの幼稚園



体力づくり



自由遊び



自由遊び



沿革

奈良学園セミナーハウス 「志賀直哉旧居」

志賀直哉旧居について

学校法人奈良学園が所有する「志賀直哉旧居」の修復工事が、平成21(2009)年5月2日に竣工した。

志賀直哉は大正14(1925)年、42歳のときに京都から奈良市幸町に妻子と共に移り住み、昭和4(1929)年4月、高畑大道町に土地を求めて屋敷を構えた。建物は、志賀直哉がみづから設計して新築したもので、昭和13(1938)年に一家が奈良を離れるまでの9年間でこの家で過ごしている。その間、滝井孝作、武者小路実篤、小林秀雄などの文人仲間や画家、彫刻家など数多くの芸術家がこの屋敷を中心に交流し、彼等の中で志賀邸は「高畑サロン」と呼ばれていた。昭和12(1937)年には、志賀直哉はこの家の二階の和室で代表作「暗夜航路」を完結させている。

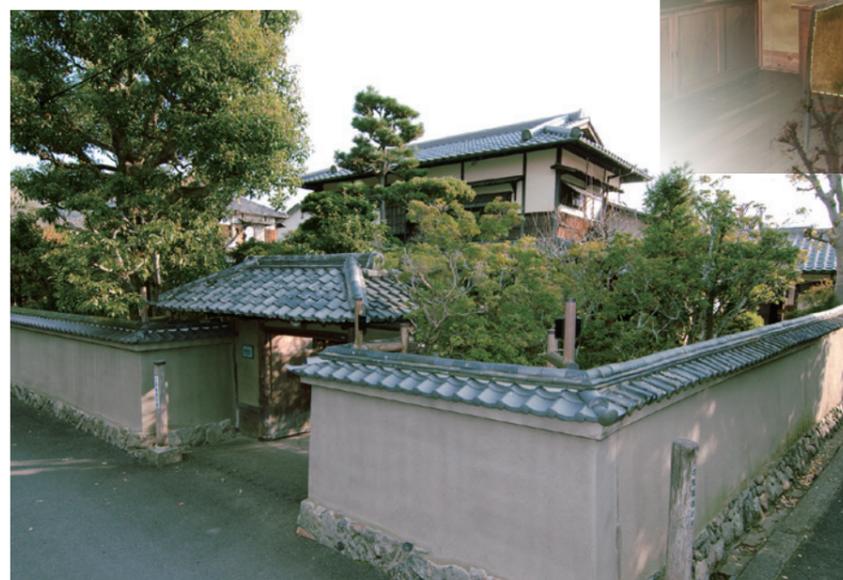
奈良学園が所有するに至った経緯

志賀邸は戦後、厚生省(現・厚生労働省)が買い取り厚生年金保養施設として利用していたが、老朽化により建替えが計画される。しかし、近代日本文学史の貴重な資産であるとして全国的に保存を望む声が高まり、そのときに奈良学園の創設者である伊瀬敏郎氏が昭和52(1977)年、保存を目的として購入すると申し出た。奈良の歴史・文化に親しみ研究することを奈良学園創設の理想とした、伊瀬敏郎氏の申し出は広く世論の支持を得て、国、奈良県の協力により買収は実現した。

直哉の居間



書斎(1F・洋間)



志賀直哉旧居

(4)和太鼓

健やかな心と身体をつくるために、平成21年度より和太鼓活動を教育課程に位置づけ、5年目を迎えている。全身で音とリズムを感じて、精一杯身体を使って叩く和太鼓が、子ども達は大好きである。友達と合奏する和太鼓の音だけに集中し、夢中で過ごす時間となっている。

地元『葛城太鼓』の先生に、伝統曲「祝太鼓」をご指導いただくなど、地域とのありがたいつながりの中で、基本姿勢から基本打ちまで丁寧に練習を重ねている。年少児から和太鼓に触れ、年長児になると自信を持って、新しい曲に挑戦している。そして、運動会や大和高田市民体育大会、短大フェスティバル、その他イベントでその成果を発表している。平成25(2003)年度には、念願のオリジナル曲も子ども達と一緒に作り、ますます盛り上がっている。

教職員も『葛城太鼓』に所属し、さらに深めようと平成26(2014)年度には園内で和太鼓研修会を月2回実施し、技術の習得に励んでいる。また、子どもの和太鼓の音につられて、保護者コーラス部の中に和太鼓チームも生まれ、園児も教職員も保護者も一体となって和太鼓を楽しんでいる。

(5)学園内の連携を活かした保育

高田キャンパス内にある奈良文化高等学校との交流や施設活用によって、単独の幼稚園では実現できない教育活動が可能となり、教育内容の自由度を高め、園児の経験を深めている。例えば、キャンパス内でのマラソン大会、たこあげ大会、みどりの幼稚園の実施、高校のクッキングスタジオでの親子クッキング、奏ホールでの子ども発表会、リズム館での七夕まつり会、寮の大浴場でのお泊まり保育の入浴タイムなど、安心した環境で生き生きとした活動を展開している。新体操や吹奏楽部の演技演奏を体験したり、また保育コースの高校生との交流など、温かい触れ合いも園児にとって貴重な経験となっている。

また、奈良学園大学奈良文化女子短期大学部との連携では、教育実習の受け入れをはじめ、短大フェスティバルでの和太鼓演奏、幼児のためのプログラム開発(音楽)や楽器演奏などの機会をいただき、学びの場を共有している。



みどりの幼稚園



和太鼓演奏



奈良文化高等学校生との交流



親子クッキング

高田
キャンパス

「直哉の時代に戻す」

奈良学園が取得した時点で、屋敷の老朽化は予想以上に甚だしく、すぐに修復工事が行われた。本学では、志賀直哉の実弟直三氏が撮影した邸内の写真や、建築時の関係者、志賀邸に出入りした人達の話などを元に建物の造作や土塀の修復などを行い、工事完了後は、昭和53(1978)年11月18日より奈良学園セミナーハウスとして活用するほか、一般希望者にも公開してきた。

平成21(2009)年の修復工事では、前回の工事よりもさらに徹底した調査を行い、「直哉の時代に戻す」をテーマに志賀直哉が設計した屋敷を「復元」することを主眼とした。志賀邸は、一時米軍が接収・使用し、旧厚生省所有時は宿泊施設となり、そのつど邸内の改修や変更が行われていたため、建築会社と宮大工に依頼して、そうした改修・変更箇所も一つひとつ解体・確認しながら極力、新築時の構造に復元したのである。

御蓋、高円、春日の山を間近に、万葉の情緒漂う高畑に復元された「志賀直哉旧居」が、奈良近代文学の遺産継承と新たな文化発信の拠点となることが期待される。



サンルーム

中庭



志賀直哉旧居を使用しての講座を開催



資料編

